

---

**棄却されました**

月末

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

棄却されました

### 【Nコード】

N0717S

### 【作者名】

月末

### 【あらすじ】

若くして死にはしたが、なぜか神様に気に入られ新しい人生と、生きることに不自由しないようにチート級な能力まで与えられ「魔法先生ネギま！」の世界に転生した主人公、永久とも言える新しい人生、気の向くままに楽しく生きてみようと考えていたのだがそれも上手くはいかず？

この物語は転生、オリ主、チートものです。魔法先生ネギま！の世界観、処女作です。基本原作に沿って書くつもりですがオリジナル要素が強くなる可能性は否めません。やりたい放題楽しく書いてい

きたいと思うので、そういったようなものがあまり好まない、嫌い、うーんとなる方はあまりお勧めしません。

## 第一話 死後の世界（前書き）

初めてなので注意書き

この物語は書き溜めておらず、行き当たりばったりで書いていくので不定期更新です。

なので誤字脱字、設定ミスが多々見受けれるかもしれません。

それでも着いてきてくれる方がいれば幸いです。

## 第一話 死後の世界

(暗い……くら……い?)

周りが真っ暗で何も見えない。

(いや、俺が目を瞑ってるだけか……。)

十数年付き合ってきた身体だ、感覚でわかる。

ゆっくりと瞼を開く。

(うっ!?)

眩しい、いきなりの光に一瞬目が眩む。

「あっ！ やっと目が覚めましたかぁ、よかったですう。」

目に飛び込んできたのは綺麗な女の人。  
背は160前半くらいか？ 白い髪を腰まで伸ばし、真っ白のワンピースを着ていて、あまり女の人との関わりが無い俺でも完璧だと思うプロポーション、出るところは出ていて、引っ込むべきところは引っ込んでいる。  
そしておっとりとした、透き通るような、耳に優しい声。  
すべてを包み込むような優しい感じ。

「意識はありますかあ？ 私の声は聞こえてますかあ？」

「ああ。」

あまりの出来事に脳が処理しきれてない、ちゃんと喋れてるだろうか………。

「ああ、よかつたあ！ このまま目が覚めなかったらどうしようかとおもいましたあ。」

俺のことを気にかけてくれてるみたいだが、何分意味が解らない。現状を把握しないと話が進まない、得れる情報は得ておこう

「ええと、ここは？」

「もう喋れますかあ、話が早く進みそうだなによりですう。  
ここはですねえ。」

## 死後の世界

「ですう。」

「え？」

少し反応に困る答えが返ってきた。

「ここは【死後の世界】ですよあ。」

「いや、聞こえてるから……ちょっと考えてただけだから。」

そうか、シゴノセイカイかあ珍しい地名もあつたものだなあー。勉強不足だったかな。」

「地名じゃないですう、貴方は死んでるんですよ。考えることが口から洩れちゃってますよおー?」

「俺、死んでる?」

「そうですねよお。」

「はあ………そうか。」

「あれええ? あまり驚かないんですねえ?? 初めてこのこと聞く人はあまりの衝撃にブリッジしてしまうのにい。」

いやなんでブリッジすんだよ………。

「まあ、実感わかないし。」

「そうですかあ、でもでも、現実なのでしょうがないですねえ。死因聞きますかあ？」

「いや、仮に死んでるなら、それ聞いてもどうにもならないだろう。」

「仮にじゃないですけどあ、なるほどあっさりしてますねえ。」

「まあ、自分のペースを保たないと落ちつかないから。」

「期待通りのお人ですねえ、流石生きてる時から目をつけていたことだけはあります。」

「……………これはちゃんと計画を実行しなくてはあ。」

「で、なんでこのシゴノセカイにいるんだ？ 普通は天国ーとか地獄ーとか行くんじゃないのか？」

「それは人によりけりですねえ、ここは私の陣地と言いますかあ、世界と言いますかあ、そんな感じですねえ。」

陣地？ 辺り一面真っ白で境界線どころか地平線が見える勢いだぞ！？

「この世界に連れてこられた特定の生き物は選択を強いられます。普通なら生きてる時の行いなどであなたの言う天国や地獄に行っちゃいますねえ。」

「特定？」

「はい、私の他にもこういった世界をもつ者が居てですねえ。そういった人たちに目をつけられた、もしくは気に入られた生き物が連れてこられるんですよ。」

気に入られた……か。  
何を言ってるか半分も理解できないが一つ解ることは。

「お前は俺が気に入ったのか？」

「はい　すごいことなんですよお、私に気に入られるってことはあ、例えるなら、お母さんが実はお父さんで、実はお前は鉄の子宮で生まれたんだって、  
衝撃的な事実を聞かされるくらいなんですよお、犬に。」

「すごいな!？」

犬に言われるのかよ！ 両親どっちも男だけでもかなり衝撃的なのに、なにが起きた！？  
いや、まあ、このことはもういい、すごいことは解った、とりあえず目の前の人は俺を気に入ってるということは解った。

「で、なんで俺はここに連れて来られたんだ？ お前との接点はなにも無かった気がするが。」

「エア」

「え？」

「私の名前ですう。お前って呼ばれるの好きじゃないですう。」

「あ、ああ、悪い。……………エア。」

「はい 確かに接点はありませんでしたあ。でもでもあ、私は貴方のことをずっと見ていましたあ」

え？なに言ってるの??

「ストーカー？」

「あははあ、面白い冗談ですねえ。私は生まれてこの方この世界から出たことはないです。」

「え？ だって見てたって。」

「見てたのは確かですう、貴方が生まれた時からひと時も目を離したことはありませんでしたあ。」

「はあ。」

ダメだ、ますます訳が解らなくなってきたぞ。

「私にはすべてを見通す眼があります。」

「目？」

「はい、【眼】です。」

「その目で俺を見てた？」

「そうなりますねえ。」

「千里眼？」

「そんな感じと思って頂いていいと思いますう。」

「おま……………エアって実はかなり凄いなじゃ？」

千里眼っておま。

「だからあ、私は凄いなですよ。」

確かにすごい、なんでも見渡せる目を持つてるし底知れぬオーラも感じる……………ん？

ここは確か死後の世界だろ？ それで自分の世界とか言ってるしこの人って……………。

「エアって神様みたいな感じ？」

「そうですねよお？」

ええ、勘で言ったんだけど合ってたよぉー、こわ。

「ちょ、ちょっと待ってくれ！ 情報を整理させてくれ。」

「はぁ？ べつぞぉ。」

「まず、エアはこの世界の神様で。」

「はい。」

「俺のことが気に入っていて。」

「面と向かうと案外恥ずかしいものですねえ。」

頬を赤らめるエア。……か、かわいいな。

「じゃなくて、それでいて俺を監視していて、死んだこの俺をこの世界に連れてきたと？」

「そうですね。本当は死ぬまでもうちよっとかかるかなあ、とか思ってたんですけどお。」

「こんなにも早くあっさり死んじゃいましたねえ。」

「う、うるさいな！ 好きで死んだんじゃないぞ！ た……多分。」

「いかせん死因がわからん、聞いておけばよかったかな？」

「と、とりあえず、整理はできた。」

「整理した結果から言つとエアは俺をこの世界に連れてきて何がしたいんだ？」

「選択が云々言つてた気もするが。」

「それを今から話そうと思つてたんですけどお、なんだかんだで前置きが長くなっちゃいましたからねえ。」

「ええ、なんかすいません。」

「いえいえ、きちんと理解した上で考えてもらいたかったですから大丈夫ですよお。」

「それではあ、説明させて頂きますっ。」

「はい。」

遂にエアの説明が始まる。

「まず貴方には転生をしてもらいますう。」

「はあ？」

「転生して新たな人生を歩んでももらいますう。」

転生？ 新たな人生？？

「つまりは生き返ってもらいますう。」

「なん……………だと!？」

「あははあ、切羽詰まったような面白い顔ですねえ。」

「顔はどうでもいい、それよりも生き返られるのか!？」

自分が死んだということがいまいち信じられないが、今起こってる現象に説明がつかないのは確かだ。

「生き返られますう。何しろ私のお気に入りですからねえ。なんでもしちやいますよお」

「でも俺は死んだんだろ？ そんな簡単に生き返らせていいのか？ それともこれが輪廻ってやつか？？」

「りんね？ ってなんですかあ？」

「ええと、生まれ変わったり、死に変わったりすることだった気が……。」

「死んだらそこで終了ですよお？ 何言ってるんですかあ、面白い人ですねえ、やっぱいい。」

クスクスと笑われる俺。

「いや！？ 現に俺を生き返らせよつと！！！？」

「だからあ、普通は死んだら天国や地獄に行っちゃってそこで永遠に暮らしますよあ？」

天国はいいところだとゼウスくんが言っていましたねえ、

「私の自慢の世界だハッハッハ！」

とかなんとか勝手に語られちゃいましたねえ、全然興味無かったですう。」

なんかさらっと凄いこと言ってる気がするんですけど!?

「地獄はサタンちゃんがそれはもう気持ちのいいところだと言っていた気があ、

「肉を叩かれ引き裂かれる快樂が待ってるぜ！」

とかババーンと言ってましたねえ、私がサタンちゃんはそういうこととされたいのお？ って聞いたら。

「なんでそんなことされなくてはいけないんだ？ 痛いだろ、バカだろ??？」

とか言われちゃいましたねえ、さすがの私もこれにはお尻ペンペンでしたねえ、はい、少しムカつきましたあ。」

なんか物凄いこと言ってるんですけど!?

ゼウス？ サタン？  
よくわからんが凄い奴らな気が……。

「ええと、もしかするとその天国と地獄とかもこのエアの世界みたいな感じなのか？」

「そうですねえ、あの二人は変わった方たちでしてねえ、種別、性格、性別なんの関係なしに、二人で交わしたルールの下、死んだ者たちを世界に連れ込んでますねえ。」

ええ、本当に変わってますねえ、何が良くて好きでもない者を連れ込んでるんですかねえ？

理解しがたいですう。その行いに共感を得てその下に着いてくと誓った天使と悪魔たちも理解しがたいですねえ？」

「お前も連れ込んでるじゃないか？」

「だからあ、私は貴方が気に入ったんですう。ちなみに貴方が初めてですう。」

あれれえ？ 確か初めてを奪われたら責任をとって頂くと聞きましたねえ？ お願いしますう。」

なんの責任だ！？

「いや、まあ、待て、話を戻そうじゃないか？」

このままじゃいけない気がする。

「ああ、そうですねえ、私としたことが、すいません。ではああ、話をもどさ……。」

「おおーい！ エアの野郎が人間の男連れ込んだって！！？」

いきなり上から黒い物体が降ってくるとともに声が聞こえた。そしてそのまま俺の前に着地。

「なにがあつたんだ！？ もう他の世界じゃエアが男を連れ込んだことで持ちきりだぜ！？」

「あのエアが、何者にも興味を示さなかったがエアが……。」  
「ザワザワって。」

「ああ、いきなり失礼ですよお、サタンちゃん、人の話に割り込んできてえ。」

サタン……だど！？

「いやそんなことはどうでもい……………くないです。すみませんでした!!」

エアから黒いオーラが発せられた。

「ほらあ、彼にもちゃんと謝らないとお。」

「わ、わかった! 謝るから!! ええと、いきなり悪かった、許してくれ。」

なんか謝られた、俺は全然気にしてないんだがな。

「あ、ああ、別にいいぞ、気にしてないから。」

「そうか! お前いい奴だな! 地獄に来るか?」

全力で断らさせて頂きます。

「そうか、いいところなんだけどな、地獄。ちょっと叫び声がうるさいくらいなんだけどな。」

まあ、しょうがないか、自己紹介しなくちゃか? オレはサタン、ここから666番目くらい離れたところに世界を持つんだけど、あ

とで

案内してやるよ、気に入ったし！」

サタンさんでした、自分のことをオレと呼んでるが性別は女だろう、女っていうか幼女？

小さい、140あるのか？ ってくらいちっこい、長い黒髪をツインに縛った可愛い容姿の幼女。  
666ってなんだよただけあるんだこんなところが。

「彼は渡しませんよお、絶対。」

「少しくらいいいだろ。」

「ダメ、で、すう。」

黒さが増した。

「わ、わかった、悪かった！

でも、これがお前が初めて連れ込んだ男か？

なるほど、面白いやつを選んだものだ、こんな奴、地獄広しと言えど、一人としていないな。」

「ありきたりな人を連れてくるわけないじゃないですかあ。」

なんか色々と言われてる俺？

「まあ、そうか。．．．．．ところで今何してたんだ？」

「あつ！　そうですう、今から転生について説明を．．．．．。」

「エア殿が男を連れ込んだと聞いたのだが！？　ままま真か！？！  
？」

また声が聞こえた、右から。

「どんなことにも無関心だったエア殿が人間の男を連れ込んだとの噂で天国は持ち切りなのだが！」

「あああああ、今日はホントにめんどくさい人が来ますねえ。旧友なので無下に追い払えませぬえ。」

「すごいな！　一つの世界に3人もの長がそろったぞ！！　流石エアの世界だな、よく持ちこたえられるな。」

変なイケメン男、エア、サタンの順で発言するが何一つ理解できない。

「ええと、こちらゼウスくんですう、さっき話した天国の世界を持つひとですねえ。」

「むっ？ お初にお目にかかりますな？ 我はゼウスここから66番目くらい離れたところに世界をもつ者だ。」

お前も666番目かよ！？ なんだここを真ん中として右から来たから右に666番目なのか？  
サタンは上か？地獄ってなんか下じゃね？？

「はあ、よろしく。」

軽く挨拶を交わすとまたうるたえ始めるゼウス

「それで、エア殿がみ、認めた男はど、どいつなのだ！？」

「お前が挨拶交わした男だよ！ バカ。」

と、俺を指さすサタン。

「なに、なんと、あの噂は真だったと………ということなのか！？」

なぜだ、我がこれでもかと言うほどアプローチをしていたというのに興味さえ示して

くれなかったエア殿が人間の男なんて！！！！？？？？」

やべえ、なんか凄いショック受け始めた………。

「クツ！ 人間の分際でエア殿と添い遂げようなど身の程をわきま  
えろ！！」

どうしても言うなら我を倒してみせろ！！！」

腕を上にあげ声を張り上げると、

いきなり何も無い空間からスウッと光る剣が現れた。

やべえ、めっちゃ神々しい。

そしてなんで、こんな好戦的なの？

「なんでいきなり最高級の神器出してんだよ、バカ！！？」

うるたえるサタン。

「止めるなサタン殿！ 我はこの男を、この男を倒さねばならぬの



キーンと耳鳴りがした、あまりの音に耳を抱えずくまる俺。

「な、なんだ一体？」

今まさに振り下ろされそうになっていた神器と呼ばれる剣はゼウスの手から粒子となって、消えていた。

ゼウスは消えた神器を見ながら立ちつくし、汗をダラダラと垂らし。サタンはうわあ、といった顔でエアを見ていた。

そして俺は、今の声の主がエアだと気付いた。

「ゼウスくん？ 何をしに来たのかと思えばあ、ホントになにをしにきたのお??？」

「い、いえ、ただただ、あ、遊びに来ただけでで……」

目で見てわかるほ震えて怯えているゼウス。 ってかおいゼウスって凄いの名前だけかよ!？」

「私の世界で暴れにきたようにしか見えないんだけどあ、皆が幸せに何不自由なく暮らせる天国を創ったゼウスくん？」

「あ、あの、すみませんでしたっ！！！」

完璧な土下座、これでもかというほど綺麗な土下座。

「おい、サタン、あれはどういうことなんだ？ ゼウスって凄いんじゃないのか？」

少なくとも俺の世界じゃかなり凄かった気がするが??？」

小声でサタンに説明を求める俺。

「んあ？ ああ、丁度いいからいいから教えてやるよ。」

確かにゼウスは凄い奴だ、無数にいる世界を持つ者たちの中でもトップクラスに位置する奴だ。」

「なるほど。」

「だがエアはその上を行くんだ。」

「は、はあ？」

何言ってるんだ？

「エアの世界は通称【虚無の世界】って言われてるんだが、その理由は辺り真っ白でなにも無いこともその一つなんだが、  
本当の理由は……………」

「いい加減にしないとあ、消しちゃいますよあ？」

「エアのテリトリーに入ったものはエアの決定次第で自由に消せるんだ。」

は？

「は？」

「一つ例を挙げるなら、そうだな。」

エアって容姿がいいだろう？ どの世界においても上位に位置する美しい奴だ、確かに。」

それでだな、いいよってくる奴がわんさかいてだな、なんていうかな、流石にめんどくさがったエアはだな……………」

エアは……………？

「察してるかとは思うが消しちまったんだ全員、力のないものは消

されたら生き返ることはできない、完璧な無だな。  
それ以来恐れられたエアは特定の人物たちを除いて誰からも近寄ら  
れることはない孤高の存在になったんだ。」

「なんだ、それ、凄すぎるというか、理解に苦しむ内容だ……」

「ちなみにゼウスはかれこれ数回消されてる。それでも近寄って来  
るからエアも呆れて放っているわけだ。」

「あ、呆れて何も言えん……」  
「神様ってやつはそんなものなのか？」

「ゼウスがシヨボいんじゃない、エアが規格外なんだ。」

「あ、ああ、わかった。」

サタンの説明が終わるころにはエアたちも終わっていた。

「もうこういったような行いはしませんかあ？」

「ああ！　しない、ゼウスの名にかけてしないこと誓う……」

「それはよかったです。」

「その、君もすまなかった、エア殿のことになるとどうも思考がまとまらなくなってしまったな。」

ハハハ、と謝罪の言葉を述べるゼウス。

「いや、しょうがない、誰にでも間違いはある。」

「おお！ 許してくれるか！！ 君はいい奴だな、どうだ？天国に来ないか??」

あれなんかデジャブなんだけど……。

「彼は渡しませんよお、絶対。」

やっぱり。

「む、そうか、いやいや、天国広しと言えど一人としていないな。」

これもどっかで聞いたようなセリフだな……。

「ところで、何か話していたみたいだったが、何の話をしていたんだ？」

「お前が話の腰を折ったんだろう！」

サタンが突っ込む

「やっと、本題に入れそうですねえ。」

もう誰も入れないようにこの世界を隔離しましょう。」

手を前にかざし何かを呟くエア。

「……よしこれで何者もここに立ち入ることはできないでしょう。」

さてさてえ、さっそく転生について話をさせていただきます。」

エアの話が始まった。

## 第一話 死後の世界（後書き）

やばいな、なんかぐだっってしまったかな？

思った以上に長くなってしまいましたすいません。

次回はやっと能力を手に入れネギま！の世界に行きたいと思います。

## 第二話 転生（前書き）

この話でネギま！の世界にいきたい（いけたらいいなあ）と思います。

最悪死後の世界は終わらせます！

遅いですよね、すみません……

上手く書けるように頑張りますので、よろしくお願いします！

## 第二話 転生

「ではあ、まず、転生先の説明に入らせて頂きますっ。」

転生先？

「なんで転生先の説明なんだ？ 普通に俺が生きていた世界に生き返るんじゃないのか？」

「いやいやあ、それだとつまらないでしょうっ？」

つまらないってなんだ!？

「いやいや、エア殿!？ 転生させるのかその男を？」

「はあー、流石エアだぜ、やる事が規格外だな!」

転生についてうるたえるゼウス。  
対照的にケラケラと笑うサタン。

「エア殿、転生とは個人で行うものではないぞ？」

我でさえ幹部たちと話し合い厳密な審査の下、対象を選び、他の世界の長たちと判決を下すのだぞ!？」

「オレは転生なんかさせないけどな。」

「ええと、なんだ？ とても凄いことなんだな、転生って……」

「そんなホイホイするものではないぞ！  
……一体エア殿は何を考えて。」

「私は前から考えてましたよお？」

「なん……はあ、どうして転生なんかしようと思ったのだ？」

「それはですねえ、気に入ってしまったからとしか言いようがありませんねえ。」

恥ずかしいですねえ、と呟きながら受け答えるエア。

「おい、お前、ホントにエアに何したんだ？」

エアがこんなになるなんて初めて見たぞ??」

サタンに聞かれるがまったく心当たりが無い俺は何も言うことができない。

「エ、エア殿!?! . . . . .おのれ、貴様!?!」

叫びながら俺に向かって手を伸ばそうとするが、

ヒュウ

風がなびいたと思うと俺に伸ばしたゼウスの左腕が消えた。

「あらあらあ、左腕どこかに置いてきちやいましたかあ?」

エアの心地いい声音なぜか重く感じられた。

「い、いや、すまなかった! 少し彼と話したかったただけなんだ!! 全身は許して欲しい!?!?!」

必死にエアの行動を止めようとするゼウス。

「おお、見たか？ あれがエアの力だ、ゼウスの腕をあんな簡単に消すやつなんてそうはいないぞ。」

いや、エアの力は凄いのはわかったが、あれ大丈夫なのか？

「お、おい腕大丈夫なのか？」

「ああ、君、我が悪かった。……許してくれ。」

「いや、そんなことより……腕。」

「ん？ 腕くらい大丈夫だ全身はちと厳しいが腕の一本や二本無くなったところで、再生に0.5秒もいらん。」

と言ってる間に無くなっていたはずの左腕があった。

「……もう訳わからん。」

「ホントに話が進まないですねえ、もういいですかあ？」

「ああ、真に申し訳ない。」

「オレは最初から何もしてないけどな！」

俺もなにもしてないぞ？

「ではあ、今度こそ本当に本題に入りますう。」

次からは質問がある時は、手を挙げて下さいねえ？」

「ハハイ」

「皆いい子ですねえ、それでは話させて頂きますう。」

まず転生先は【魔法先生ネギま！】の世界ですねえ。」

初っ端から疑問が浮かんだ俺は手を挙げる。

「はい。」

「はい、なんででしょう？ なにか解らないことがありましたかあ？」

「解らないっていうか、最初に言った通りなんだけど、なんで俺のいた世界じゃないんだ??」

てかなんで魔法先生ネギま!なんだ?

確か小さい先生が生徒たちと日々を過ごしていく物語だったか?

おおまかしか知らんがあの子はとも素直ない子だったのは覚えてるぞ。

「それはですねえ、私が好きだからあ、という理由もあるのですが、あなたのいた世界は基本何事もない、つまらない世界じゃないですかあ。」

「つまらないって……」

「まず何も能力とういか力がないですねえ、物さえ浮かせられない、これは生きていく上でとても不便ですねえ。」

次に短い寿命、現に貴方は若くしてその肉体とおさらばしてますからねえ。非常に脆いですう。」

おおよと目元を指先で拭うエア。

「確かにそれはわかるな、オレの世界も最近来るのはお前の世界の

生き物ばかりだ。」

うんうんと頷きながら何か納得しているサタン。

「それですねえ、貴方が転生する【魔法先生ネギま!】の世界は確かに貴方と同じ人間はたくさんいますが、

その他にも様々な種族が入り混じり日々を過ごしています。

それに【魔法】というものがあり、それはそれは便利な世界です。………。あとここだけの話なんですが、あの世界、多少無理をしても受け入れてくれるとても使い勝手のいい世界なんです。」

な、なるほどなのか??

「それでその、結論から言つと、なんか色々できるからその世界と?」

「ぶつちやけますねえ、まあ、そうですね。」

はあ?

俺は頭に疑問符を浮かべることしかできない。

「わかった、いや、なにもわからないが、転生先についてはもう何

も言わない。」

「それはよかったです。」

「それで次だ、俺はどうすればいい？」

「どっつてなんですかあ？」

「仮にも魔法世界だろ？ ただ生き返って終わりではないだろ？」

なにか裏があると思えない……………。

「いや、ただ生きてもらうだけですけどあ？」

「なん……………だと!？」

「何回見ても、その顔面白いですねえ。」

「顔はどつてもいい！ 本当に生き返るだけなのか??？」

「だからあ、そう言ってるでしょう？」  
その世界で貴方が何しようかと勝手ですねえ。」

「な、なるほど……もう何も言わない。」

もう意味が解らない。

「質問終わりですかあ？ なら早速転生するにおいて、ある程度設定をしておきましょう。」

設定？

「やっぱりするのか、違う世界なんだからそのまま送っちゃうのか  
と思ったがすることはするんだな。」

やれやれといった風にサタンがぼやく。

「当たり前ですよあ、私は完璧主義者なんですよあ？  
ええと折角ですからサタンちゃんとゼウスくんも手伝ってくれます  
？」

「オレが？ ううん、メンドクサイことは嫌いなんだけど、あいつ

のこと結構気に入ったからな。

「……しょうがない珍しくエアの頼み事だ！手伝おう！！」

「まあ、よかったですう。」

ゼウスくんは手伝ってくれますよねえ？」

さつきからだんまりだったゼウスがやつと口を開いた。

「本当なら手伝わないのだが、数々の無礼深く反省している。

……罪滅ぼしだそれくらいはしよう。」

神様が罪滅ぼしとか笑えねえ……。

「ではではあ、只今より『ドキドキ どんな感じになっちゃっの？  
大改造劇的ビフォーアフター』はじめます」

「「イエーイ」」

「「イエーイじゃねえよ！？」」

こいつら楽しんでやがる！！！？？？

「はい、まず最初はあ、性別ですねえ。」

これは男でいいと思うんだけどあ、皆はどうかなあ？」

「「異議なし」」

なんだこいつら、考える気あんのか？

「俺も男がいい、てか女になんかなりたくないな。」

「女の子は女の子なりにいいと思いますけどあ、私は男の貴方が気に入ってますのでえ、男でいいですねえ。」

次はあ、歳ですかねえ？」

「老け顔は好まん！」

とサタン。

「あまりに若くても動きに制限がかかってしまうかもしれんな。」

とゼウス

「ではお二人の意見を参考にしつてえ、20歳くらいにしますかあ？  
これならすべてギリギリおーけーですねえ。」

「「「異議なし」」」

これには俺も同意せざるおえない、十代だとなにかとやりにくいからなあ。

「次は容姿ですけど、貴方はもともとから美形なのでそのままでもいいですねえ。」

一言言わせてもらうとですねえ、不細工を私が気に入るわけないでしょう。」

「確かにお前カッコいいな！」

「私の周りもそれなりの容姿がそろってるがそれ以上だな、その顔で産んでくれた親に感謝するがいい。」

なんかしらんが大絶賛。

「最後にい皆さんお待ちかね、能力値の割り振りですう！」

「我たち三人が手をかけているのだ、それなりにしなくては示しがつかんだろう。」

「そうだな、オレが手伝ったのに簡単に死なれちゃ他の世界の奴らに笑われちゃうぜ！」

「ああ、皆さんノリがよくてよかったです。」

ではこの割り振りは転生してからののお楽しみにしときましようかあ。

」

「だったら能力もそこで発表しようぜ！」

「そうですねえ、うーん……そうしましよつかあ。

では、大体のことが決まったので、貴方を【魔法先生ネギま！】の世界に転生させましょう。」

「え？ そんなんでいいのかよ!？」

「いいだろ？」

「賛成あれど否定の理由が見当たらんな？」

「いいんじゃないですかあ？」

「…………オレどうなるの？」

「大改造とか言いましたけどお、それほど変わりませんでしたねえ？ 歳くらいですか？」

「やっぱり元がいいと楽でいいですねえ。」

「ではあ、新しい人生楽しんで下さいねえ  
あっ！ 一番大切なこと忘れてましたあ。」

「なんだ？」

「お名前ですよ。」

「確かに一回も名前で呼ばれた覚えがないな！」

「すっかり気にしてなかった…………。」

「お名前なくては不便ですからねえ。」

「そうですねえ、転生後貴方は『零』と名乗ってください。」

レイねえ。

「ああ、わかった。」

「頑張れよ、零！」

「零殿、幸運を祈ってるぞ。」

「ああ、色々あったが楽しかったぜ。」

サタンとゼウスにお別れをいい、意識が遠のいていく。

「ちなみに言い忘れましたけどお、零は700年前のネギま!の世  
界からスタートしてもらいますう。」

なんで700年前なんだ!?

「それは次に目を覚ましたらあ、能力と一緒に説明しますう。」

なんだ・・・それ。

こうしてまた俺の視界は黒く染まった。

## 第二話 転生（後書き）

い………いったかな？

ノルマの死後の世界は終わったので、それでよしとしてくれたら嬉しいです。

ちなみに、なぜ700年前かというと、次回本文でも説明したいとは思いますが、今後の予定として書かせて頂きます。

ええと、大きく分けて3つほどありますかね？

一つは能力の説明と扱い方を学んでいきたいと思ってるからです。

（最初から強くてもそれ相応の修行は積んでくれないと私がこの主人公を好きになれないと感じました。）

もう一つはおわかりだと思いますがエヴァです！ヒロインにする予定です。

最後は大戦を経験しておきたかったからです。（ナギとの接点をつくりたかったからです。）

ありきたりですね……

でもまあ、こんな感じでいきたいと思えます。

原作に沿うようにしますがこの先はまだまだオリジナルが続くと思  
います。  
見限られないように頑張ります。

### 第三話 基本（前書き）

ここでは主人公の基本能力値を紹介していきたいと思います。

オリキャラが存在していて気分を害してしまう方々がいたら申し訳ありません；；

今後も食い込んでいく可能性がなきにしもあらずんば虎兇を得ずなので、寛容な心で愛でてあげて下さい。

### 第三話 基本

.....ん。

肌に感じる堅い感触。

「.....ここは?？」

気がつくと俺は、地面の上に寝ていた。  
視界が徐々にクリアになっていき、現状を把握するため立ち上がり、  
周りを見渡すと緑に囲まれている。  
少し冷たい風が肌を撫でた。

「も、森?」

俺を中心に少しひらけた構造になっているが、  
どういふことか森の中にいた。

(ええ.....。)

ちなみに、生き返るということで新しい人生どうやって過ごそうかな、と考えていたりした。

海の見えるところに住むのもいいなあ、とか。  
やっぱり気の向くままに世界中を旅しようかなあ、などと。  
隠していたのだが、実は結構テンションが上がっていて、色んなこ  
とを妄想していた（転生前に数秒ほど）。

が、しかし現実は……………。

「な、なんでだ。」

テンションはただ下がりはした。  
上を見上げると昼間なのだろう、木々がじゃまをするが、太陽を辛  
うじて確認することが出来た。

しかし、この森の中ではあまり効果はなく、薄暗いままだ。

「……………嫌がらせか？」

正直そうとしか思えなかった。

「あらあ、そんなことないですよあ？」

「!!!???」

いきなりの声、さっき見回したときには確かに誰もいなかったはずだが！

ていうか、どこかで聞いたことあるような声だ。

恐る恐る声が聞こえた方を向くと。

「あらあら、さっきぶりですねえ。」

エアがいた。

「なんで!?!」

「なんでと言われましてもお、後日発表すると言いました能力値の件としかいいようがないですね。」

あ、ああ、そういえばそんなこと言ってた気がしないでもないな。

「零殿、忘れていては困るぞ。」

「そうだ、なんてったってオレが一生懸命考えたんだからな！」

何もないエアの後ろから丸い魔法陣？みたいなものが出現し、そこから声と共にゼウスとサタンが現れた。

「駄目だ、最近理解できないことが多すぎてもうやばい。」

なんかもうやばい。

「なにいつてんだ零？それよりどうだった！魔法世界だからな、なんか魔法使いつぼく現れてやったぜ！」

なにかサタンが言ってる気がするが、気にしないことにする。

「まあまあ、それくらいにしといてえ。  
それでは、時間がもったいないので早速説明させていただきます。  
あらあ、最近こんなことばかり言ってる気がしますねえ。」

エアの説明が始まった。

「まず最初に、何もしなくても寿命というもので死んでしまうと思  
いますのでえ、その鎖から解き放させて頂きましたあ。」

え？

「簡単に言えば不老ですねえ、外見も変わることはないですう。  
よかったですねえ。」

「よかったです……………のか？」

「まあ、我達とあまり変わらないな。」

「あとお、これからのこの世界のことを考えるとお、寿命が無くても戦に巻き込まれて、あっという間に死んでしまおうと思いましたが、  
でえ。」

細胞を少し改造しまして瞬間的な再生を可能にしましたあ。  
簡単に言えば不死ですねえ。」

「オレ達とそんな変わらないな！」

はあ！?!?!

はあ、もうどうにでもしてくれ……………。

「次はこの世界の要とも言える『魔力』ですねえ。」

「魔力？」

「はい、魔力とは魔法を使うために必要なエネルギーですねえ。」

魔法ねえ……………。

「普通なら魔法を使うことによって魔力が徐々に減っていき魔法が撃てなくなってしまうのですう、ゲームで言うMPみたいなものですねえ。」

「まあ、大体はわかるな。」

てかゲーム知ってるんだな。

「それでえ、またまたその鎖から解放させて頂きましたあ。魔力使いたい放題でえ、無くなることなんて絶対ないですう。」

「解放しすぎだろ!!?」

いやいやしすぎだろ!?

「あなたが死んでしまうと困るのでえ、仕方のないことなんですう。」

「確かに零殿が亡くなると困るな。」

「主にオレ達の立場がな!」

「はあ？」

「転生前に言ったけどオレ達三人が関わってるんだ、それなり以上になってもらわないと困るんだよ。」

「私はそんなことどうでもいいですけどお、零が亡くなるのは嫌ですからあ。」

なんだそれ………。

それにしてもなんていうか、あれだな。

「………チートだな。」

「これぐらい普通だろ？」

「普通ではないか？」

「まだ足りないくらいですねえ。」

基本だろ？みたいに言うサタン、ゼウス、エア。

「ちなみに身体能力も強化してあるのでそこらへんの人達は圧倒ですねぇ。」

「そこらへんと言つと?」

「吸血鬼、古龍種などは素手で頑張ればなんとかあ。」

「それ最強じゃないか? 魔法いるのか??」

古龍種とかがどれほどすごいかわかんないが、最強な気がする……

「いえ、あくまでもお互い素手で戦ったときの話しなので、吸血鬼とかは素手だけだとちょっとキツイですかねぇ? まだ幼ければ勝てると思いますが、数百年も生きていともなれば勝てないかもですねぇ。」

「いやいや充分だろ!？」

「そんなわけでこれが基本値になりますねぇ。」

「基本っていつか最早カンストだろ。」

「いえいえ、零はこれから修行してレベルを上げてもらいますう。」

は？

「修行？」

「はい、修行ですう。」

「いや、なんていうか何もしなくても俺もう強いだろ？」

むしろ最も強いと書いて最強だろ？

「自分の力に溺れる者はあとで痛い目見ますねえ。」

強いて言うならば、確かに強いかもしれませんが、肉体だけで精神や知識は全然ですう。」

むう、そう言われればそうだな、魔法撃ってみるとか言われてもさっぱりだ。

「そういうことで私達と一緒に死なないように強くなりましょう。」

「たち？」

「不本意ながら手伝わさせて頂く。」

「言っとくけど容赦しねえからな！」

なぜかやる気満々なゼウスとサタン。

「ええと……………」

俺、修行で死ぬんじゃね？

### 第三話 基本（後書き）

段々一話一話が短くなってる感じがしますが、最初が長過ぎたということでしょうかお願いします。

話しを変えまして。

ヒロインや今後のことについてなにか意見でもあれば参考にさせていただきます。

ハーレム案や、パーティ編成、その他ご意見があればどんどん突っ込んで下さい。

ちなみに私が考えているヒロインはエヴァ、真名で入れることが出来れば楓とかですね、原作でネギに好意を抱いてる人達に関しては基本そのままでもいいからおうとは思ってますが、あくまでも基本なので、気にしないでください。

むしろ消し去ってしまったって結構です。

次にストーリーに関してですが。

今のところ、紅き翼に合流したいと思います。

理由は後ほど書くと思いますが、今は勘弁して下さい。

(1)の物語は読者様の方によって成り立っています。

#### 第四話 修行くそして別れ（前書き）

題名通りここでエア達とはお別れにしたいと思います。

試しながら書いていることもあり、もしかすると見苦しい点が見受けられるかもしれませんが、よろしくお願いします。

#### 第四話 修行くそして別れ

「まず最初に、修行を行うにあたってえ、それぞれ専門の講師の方を紹介したいと思います。」

はあ？

「まず最初に、主に武術などの【戦闘】を教えるサタン先生です。」

「まあ遠慮するな、オレのことは師匠と呼べ！」

ドヤ顔でババーンといった感じに宣言するサタンが現れた。

「次に生きていくうえで必要となる【知識】を教えるゼウス先生です。」

「我は普通に先生で結構だ。」

白衣に眼鏡という、いかにもといった姿で登場したゼウス。

「そして最後に、この世界の要、【魔法】を担当するのはこの私、エアですう。」

ええと、私はエアでいいですよぉ?」

エアはぺこりとお辞儀をすると、「よろしくお願いしますう。」と挨拶をした。

「っってお前らかよ!?!?!?」

これでもかと突っ込んだ俺。

「我たちほどの適役はいないと思うぞ?」

「零!お前を武神にしてやる!」

「とらっ!とらっ!とらっ!」

どういふことだ!?!?

サタンがやけに張り切ってるし!

その日から俺の修行の日々が始まった……。

いや、あれは地獄の日々だった。

とりあえず初日の風景をまずお伝えしたいと思う。

「verサタン」

「いいか零！オレが教えるんだから、絶対にお前は強くなるやないといけない、ということとは解るよな？」

「え？ いや、解りません。」

ドゴンッ

鈍い音と共に、地に足着かない浮遊感を感じた俺は、数本の木を叩き折って、やっと自分の身体が吹っ飛んでいることを理解した。視界が暗転し、なにをされたか解らないままサタンの声が轟いた。

「馬鹿ものが！ オレの質問にはすべて「イエス！」で答えろ！  
わかったか！」

多分肺が潰れているだろう、息ができなく、狂いもがき苦しんでいた俺だが、数秒と待たず回復した。

(し……………死ぬかと思った。)

いや、実際あのままだと死んでいただろう。

エアが言っていた不死の説明を思い出し、それに心から感謝した。ていうか、なんだ今のは？ 殴られたのか？

あんなちっちゃい体躯のどこにそんな力が……………。

「聞いているのか！」

再びの問いに恐怖した俺は、ちゃんと返事を返した。

「イエス！」

「馬鹿にしてるのか！」

再びの暗転  
薄れゆく意識の中俺は

(どつすりゃいいんだよ……。。。)

と真面目に悩んだ。

「verゼウス」

「ええ、エア殿に任されたからには命をかけてでも零殿に知識を植え付ける。」

「……………ハイ。」

「どうした零殿？ やけにボロボロだな。」

ゼウスが言う通り、俺はさっきまでサタンの修行と言う名の拷問と  
いつか殺戮を受けていたのでボロボロだ。正直休ませろ。

「まあ、気にするな続けろ。」

とにかく思い出したくもない。

「く、苦労しておるのだな。零殿がそう言うのなら何も言わんが、  
頑張れとだけは言っておこう。」

「ああ、ありがとう。」

「それでは、始める。

私の担当は知識だからな、身体を動かすことはせん。気楽に勉強し  
ていこうではないか。」

「ああ！ そうだな！！」

サタンの修行があまりにも過酷すぎたため、ゼウスの言葉がとても優しく感じられた。

（これが神か……あたたけえ。）

……そう思っていた時期が俺にもありました。

ゼウスの授業は確かに肉体が酷使されることはなかった。  
がしかし……。

「どの……零殿！ 聞いているのか？」

「あ、ああ。」

まったく気楽じゃねえぞ!?

難すぎて何言ってるかさっぱりわからん!

数学、文学など基礎知識から始まり、遂には帝王学を学び始めた。  
おいおい、帝王学ってなんだよ……………。

「では、次に……………」

……………もう勘弁してくれ。

「verニア」

「ではではあ、お待ちかねの魔法の授業のお時間ですう。」

「おお。」

肉体、精神共に酷使した俺は流石に一旦休憩をとって受けることにした。

「最初から魔法理論とか言っても理解しないと思うのでえ、やっぱり身体で覚えるのが一番ですねえ。」

激しく嫌な予感しかしない。

「はいまずはこの杖を持って下さいねえ。」

そう言って渡されたのは先っぽに星のついた可愛らしいデザインの棒。

「これは？」

「それは杖ですう。初めて魔法を使う人はその杖を使って基本を覚えるんですよ。」

「へえ。」

なかなか魔法使いっぽい感じに、さっきまでの不安は消え、俺のテンションは徐々に上がっていった。

「それでは始めたいと思いますう。

私の真似をしてやってみて下さいねえ。

『プラクテ・ビギ・ナル 火よ灯れえ』。」

そうエアが唱えると

ポッ

と音を立てて杖の先端に火が灯った。

「おお！」

最早俺のテンションはMAXだった。

「では、どつぞお。」

「よし！ ええと……。」

『プラクテ・ビギ・ナル 火よ灯れ』！！」

ゴオオオオオ！！

目の前にあつた緑豊かな森が消し済みになった。

「おお……………」

まさかの展開に驚きが隠せない。

「あらあらあ、少し力み過ぎですねえ。  
もう少し抑えて頂かないと困りますう。」

ええ……………。

そついう問題なのか？

「あなたの魔力は無限大なのですからあ。気を付けて頂かないと、  
ここら一带無くなっちゃいますう。」

「はあ……………」

改めて自分の凄さを再確認した。

「ええとお、まず力の扱い方からですねえ。零が覚えることは。」

「……………はい。」

とまあこんな感じである。

大岩をも軽く砕く拳なのに、サタンは軽々と受け止め。

「脇が甘い!!」

とカウンターを喰らい、俺は見事に吹き飛ばされ。

寝ることも許されず168時間ぐらいつつ続けてゼウスの講座を受けさせられたり。

「攻撃を先に学ぶより防御を先に学んだ方が、あとあと自分のためになるかもしれないねえ。」

それでは障壁を展開し、結界を敷いて下さい。」

「なるほど。了解した。」

「その状態でこれを72時間受け続けもらいますねえ。」

少しでもヒビが入ったり割れたりしたら最初からですう。」

と小さなクレーターができるほどの威力を持つ『魔法の射手』を立て続けで放ってきたりした。

最初の数年はともきつかった、最初に述べたように地獄だった。今思い出しただけでも身体の震えが止まらない。

しかし人間という生き物は慣れるもので。

10年、20年、30年と修行していくうちにそういった内容も軽々とこなせるようになった。

「零を鍛えて早70年……」。

最初の10年を基礎にあて。

20年を応用。

40年をサバイバル形式の実践にあてましたあ。」

「もう誰にも負けることはないな！」

「そうだな、我達でも勝てるかどうかわからん程に、力とそれ相應の知識を身につけたな。」

「ああ、今となっては感謝してる。」

修行を終え俺はエア、サタン、ゼウスの三人から免許皆伝を伝えられた。

そして、それと同時に

『私達が力を貸すのはここまで』

という別れの言葉貰った……。

「オレ達が教えることはもうないからな、だけど、このまま「はい、さよなら。」じゃ流石のオレも後味が悪い、そんなわけでこれをする!！」

と言ったサタンが差し出してきた物は、色は黒く、細長い柄の先に刃物のついた、いわゆる【大鎌】と言うやつだった。

「………これをどうしろと?」

「やる! これをオレだと思って毎日抱いて寝ろ。」

「寝ねえよ!!」

ふざけんな!

「そう言わず持つてる!とりあえず様になるだろ。」

そう言つて、無理矢理にでも俺に大鎌を持たそうとするサタン

「わかった、わかったから! ありがたく受け取っとく。」

「そ、そうか。 . . . . . よかった。」

ホツとした感じにサタンは息をついた。

「我からはこれをやるぞ。」

ゼウスが差し出してきた物は、傷一つない真新しい赤い色をした一冊の【本】。

「これは?」

「それはこの先のことがおおまかに描かれている『予言書』だ。」

「予言書？」

「暇な時に読んでみるといい、きっと役に立つ。」

「そうか、ありがとな。」

「なに気にするな。」

「私からはこれです。」

そういうとエアは「そこに止まっていて下さいねえ。」と言いながら、自分の右手を地面にかざした。すると俺の足元に魔法陣が浮かび上がった。

「なんだこれ!？」

「私からはこれをあげちゃいます。」

「は？」

そう言ったのも束の間。

エアはその魔法陣の上に立ち、俺と向かい合うといきなり。

「むぐう!？」

俺の唇を奪った。

「ん……ちゅ、はぁ……むぁ……。」

キスをした途端地面に描かれた魔法陣が光りだした。

てか、した！ 舌が入ってる!？

「んう……ふう、はぁ、はぁ。ごちそうさまでしたぁ」

唇同士が離れると、唾液の糸が引いた。

激しいキスがようやく終わると同時に魔法陣の光も無くなり、目の前に2枚のカードが出てきた。

「ふふふ、私の初めてまたあげちゃいましたぁ 零は罪作りな男

ですねえ。」

「またもなにも、俺はなにもしてねえ。」

激しく冤罪である以前に被害者だ……。

「まあ、それは置いといて。はい、これをあげますう。」

とさつき出現したカードの一枚を俺に手渡すエア。

「これは……【仮契約カード】か？」

そこには全身を覆う黒いローブをまとった姿と、鎖で巻かれた時計を持っていて俺が描かれていた。

「はいそうですう、ゼウスさんの授業で習いましたかあ。」

ああ、確か

パートナーと念話できたり、遠くから呼び出すことができたり、能力や道具を発動できるとかだったかな？

「その通りですねえ、素晴らしいですう。  
まあ、とはいっても活用するのは【アーティファクト】くらいです  
ねえ。

ちよっと試しにやってみて下さい。」

「わかった。

ええと、確か『来たれ』？だったか。」

俺がそう唱えるとカードが光りだし、収まった頃には俺はカードに  
描かれた姿と同じ格好をしていた。

「鎖巻かれた時計とは洒落ているな、零殿。」

「イカしてるぜ！」

「どんな効果があるんでしょうねえ？」

「まあ、それは後々使って行けば解るだろう？」

「それもそうですねえ。」

サタン、ゼウス、エアとそれぞれ一人ひとりと言葉を交わしたあと、あっという間と言うべきか、クライマックスに差し掛かった。

「それじゃ、これで思い残すこともないな、本当にお別れだ！」

「いつまでも一緒にいるわけにもいかないのな。」

「ええ、悲しいですが、ここまでですう。」

「本当に感謝してる、あと、楽しかったよ。」

「オレもだ！」

「ああ、私もこんなに楽しく感じたことは初めてだった」

「私もですう。」

ああ、みんなありがとな……。

「それじゃ。長くも短い感じだったが……。」

「んじや。」

「うむ。」

「ええ。」

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

その言葉を最後にエア、サタン、ゼウスは俺の前から姿を消した。

#### 第四話 修行くそして別れ（後書き）

終わりましたねえ。無理やりでしたかね？

そんなことなかったと思っていただけたら幸いです。

次回からやっとうエヴァが出てきます。

長かった、ほんとに……。申し訳ないです。

## 第五話 日常（前書き）

時間の進みを早くしております。

違和感がぬぐえないかもしれませんが、ご了承ください。

## 第五話 日常

「……………ちとど。」

エア達と別れてからの俺は、教わったことを忘れないように適度に修行しながら。

「寝よ。」

……………ダレていた。

森の中にいる俺だが、野宿とかしている訳ではない、ゼウスと木で造った家がある（エアとサタンは見てた）。  
これが結構大きく一人で住むには心細い。  
食料などは森の周りを散策すれば十分に手に入る（ここから離れたところに村もあるので、何か困ったらそこに行けばいい）。

「ああ、暇だ。」

つい数日前まで安息と言う文字はない日常を送っていたせいか、晴れて自由の身になると、なにをすればいいか解らなくなっていた。

「どうするかな、………旅にでもでるかなあ。  
がしかし名残おしいな。」

思い出が引きずってなかなか動き出せない。

「まだここに住むか。」

となると、この暇な時間をどうするか。

「………アーティファクト。」

そういえばエアとの仮契約カードがあつたな、出したことはあるが、いかんせん使う機会がなくてどんな効果があるかもわからない。

「使ってみるか。」

『来たれ』。」

黒いローブを纏い、鎖に巻かれた時計が現れる。

「ええと、これどう見ても時計だよな？」

しかしピクリとも秒針が動いてない。

「どれどれ。」

試しに魔力を流し込む、そうすると時計が俺の手から離れ浮き始めた。

次に巻かれていた鎖が解かれ、俺の前に浮いている時計の回りを球状に囲い始めた。

「おお。」

持たなくてもいいのか、便利だ。

「他には、どんな機能が。」

「………時計だからな、時間関係だろうな。巻き戻したり出来るのかな？」

そういつといきなり鎖が伸び、俺を囲い始めた。

それが徐々に光を帯び始めたと思ったら、俺の身体に変化が起きた。

「なんだ!？」

なんと身体が小さくなっていく。

俺は急いで鏡を確認した。

鏡を覗き込むと、6〜8歳くらいの外見になっていた。

「おお!」

完璧に幼くなってる!

これはもしかすると……。

「おお!」

試しに老いるかどうか試してみると、見事に50歳くらいの老人になっていた。

「なるほど外見の時間を変えることができるのか。」

不老の俺にはとてもありがたいと思われるアイテムだ。

「他にはなにか機能は？」

と時計を眺めながら試行錯誤していると。

リン

と、不自然に鎖同士がぶつかり合い、音が鳴り響いた。  
しかし。

「なにも起きないぞ??？」

なにも起きなかった……。。  
色々と試してみたが音が鳴るばかりで全く解らなかった。

「でもまあ、俺とエアのアーティファクトだ、きっと凄い能力だろ。  
『去れ』。」

その日からアーティファクトの研究が追加された。

いつまでかはまだ解らないが、まだここに住もうと決めた俺は、

「とりあえずそんなような時期になったらここを離れて旅すればいいか。」

と永遠の命を持つてるからこそ言える言葉を呟きながら、気楽に生きることにした。

最初と違い、暇な時間を有効に使おうと、開き直った俺の気楽な日々を簡単に説明すると。

ゼウスの予言書を読んだり。

「なになに、1981年に戦争が始まる？  
大変だな。」

今は確か1370年頃か？

「まだまだ先じゃねえかよ!?!」

資金を調達するために村で討伐系の依頼（簡単に大金が手に入るの  
で）をこなしたり。

「なんか金のいい仕事あるか？」

「ん？ おお、レイさんじゃないか！  
皆！レイさんが来たぞぉー！！！」

「レイさん！ 最近こちら一帯に魔族がうろつろしてて他の村の物資が届かないんだよ、頼んでいいかい？」

「それは大変だな。この村が潰れては困るからな。」

「レイさんレイさん！ この村にとって大事な鉱石がとれる鉱山に、竜種が住んじまって作業が出来ないんだよ！」

「そ、そうか。 とりあえずその竜を見に行こう。」

（なんでこんなに皆寄ってくるんだ！？）

後々村人に聞いてみると……………。

「確かにここは、それなりに強い人が依頼を求めてくるけど、レイさんが一番強くて早く仕事をこなしてくれるからねえ！」

と、知らないうちに俺の評価が上がっていたらしい。

こんな感じで毎日を過ごしていると30年ほどの年月が過ぎていて、村は治安がいいと評判になり町へと変わっていた。

俺？ 俺は何も変わってないぞ？

町というだけあって、結構大きくなりそれと同時に人も増えた。たまにしか村に降りないので、俺が知っている人達はいつの間になくなっていて、なかなか寂しい気持ちになった。

そんなある日。

「ここにレイと言つ者はおるか！……！」

家の前でいきなりの叫び声。

「ああ？」

寝てるところを起こされた俺はイライラしながら。

( 結界張つとけばよかったな……… )

と思いながら外に出た。

「俺が零だが？　なんかあつたか？」

外に出ると数人で隊列を組んだ兵士たちが並んでいた。

そのうちの偉い奴なのだろう、前に出てきて紙を取り出し声を張り上げこう言った。

「貴様に吸血鬼退治を命じる！！　ちなみに拒否権は無いとのことだ！……！」

「はあ?」

何言ってるんだ?

「訳わかんないんだけど?」

「吸血鬼退治を命じる!」

「いや、それは理解してんだけどなんで俺なんだよ!」

あまりの意味不明さに俺は少し威圧的に言い返した。

「うっ!? そ、それはだな最近吸血鬼がこの町に現れるらしい。そのことで領主様は悩んでいたのだ。どうしようかと考えているとふと、貴様の数々の武勇伝が耳に入り、金ならそれなりに出すから是非とも退治して欲しいとのことだ。」

「ああ。」

納得したよう नाही ような。

「話しは以上だ！」

そついうと踵を返して町へと帰っていった。

「わけわかんねえ……………」

興味が全然湧かなく金にも困ってなかったので、スルーすることにしました。

数日後。

「おっ？」

今日はなにをしようか悩みながら薪を集めていると、人が一人倒れていた。

「なんだ？」

近くに寄り様子を確認する。

「女の子か？ 外傷は……ないな、服も汚れてるだけで襲われたという形跡は見当たらないし、道に迷ったか？」

「……こんな場所で倒れてるところを、熊にでも見つかったらスプラッタなことになってても可哀想だし、とりあえず保護するか？」

と俺は少女を抱きかかえ自宅に戻った。

## 第五話 日常（後書き）

なかなか物事を違和感なく進めることができない歯痒さでございます。

アドバイスなどがあれば参考にしたいと思います。よろしくお願ひします。

主人公のアーティファクトにしましては徐々に詳しく書いていきたいと思ひます。

第六話 少女（前書き）

今回は短いですが、はい……………。申し訳ないです……；

## 第六話 少女

「さて、どうするか。．．．．．とりあえず目を覚ましてくれな  
いと何もすることが出来ないんだけど。」

目の前にいる少女、歳は10歳くらいか？  
まあ、そのくらいの少女をベッドに寝かせ様子を見てる俺。

現在時刻は夜中の10時、朝から寝かせてるが一向に起きる気配が  
ない。

(．．．．．勘弁してくれよ。)

汚れていたので一応服を着替えさせたけど．．．．．。

「サタンの服、捨てないでよかったな。」

ちなみに服なのだが、いわゆる『ゴスロリ』というのか？  
そんな感じのを着ている。

サタンがこのような服ばかり好んで着ていて、これぐらいしかなか  
ったのだ。

着せるのにかなり手間取った．．．．．。

「って、こんなこと言ってる場合じゃなかった。  
そろそろ、マジでなんとかしないとこの子の親も心配するよなあ。」

「ん……………」

「おっ」

目をこすりながら起き上がる少女。

「……………!!?」

「じ、じじはー!」

一瞬寝ぼけていたみたいだが、本格的に覚醒したらしく辺りを見渡す少女。

「おお、やっと起きたか! いや、寝すぎだろ?  
倒れた時変なところでもうったのか?」

「!?!?!?」

誰だ貴様は!!」

突然の怒声。

確かにいきなり声をかけて驚いたかもしれないが、それにしても警戒しすぎだろ。

「いや、森の中で倒れてるところ助けたやったんだから、感謝すらされこそ怒鳴ることはないだろ?」

「む。……………そうかすまない。

ではない!?!?　ここは何処だ!なんでここに私がいるんだ!?!」

うーん、うるさい子供だ。サタンだってもっと静かだ……………いやそうでもなかった?……………うん、この話は可哀想だから止めとこうか。

「まあ、落ちつけ。　紅茶飲むか?」

「あ?　ああ……………おいしいなこれ。」

「そうだろう!　エアもお気に入りだな、俺の自慢でもある。」

「エア?」

「い、いや、なんでもない気にしないでくれ。」

「??？」

疑問符を多量に浮かべているが話しを戻さなくていけない。

「と、とりあえず落ち着いたか？」

「ああ。ありがとうございます、おいしかったです。」

「それはよかった。

で、だ。話しを戻そうと思うが、ここは森の中にある俺の家。お前は森の中で倒れていてピクリともしなかったから俺がここに運んだ。」

「な、なるほど。」

「解ってくれたか？」

よし、次は俺の質問の番だ、まずお前の名前、次になんで森の中で倒れてたか教えてくれるか？」

「……………」

「どうした？」

（……………答えられないのか、答えたくないのか。）

この様子を見るに前者ではないだろうな、記憶失ってる感じではなかったからな。

「すまないが一つ質問させてくれ……………お前はこの町の者か？」

「この町？ ああ、俺は別にあの町の奴じゃないぞ？  
確かにたまに行ったりもするがホントにたまにで、金を稼ぎに行ったり必要な物資を調達しに行くくらいだ。」

「そ、そうか……………なら大丈夫か？」

最後に何か呟いた気がするが小さくて聞き取れなかった。

「私の名前はエヴァンジェリンだ。」

「エヴァンジェリン？」

エヴァンジェリンってあのエヴァか？

（確か原作だと【吸血鬼の真祖】とかなんとかでネギの師匠だったか？ あ！？）

先日の兵士たちの言葉を思い出し、疑問が確信に変わっていく……。

（エヴァが現れたっていうことは、ホントにここは【魔法先生ネギま！】の世界なのか……。）

実は半信半疑だったということは内緒だ。

「い……。おい！」

「ん？ ああ、なんだ？」

考え事に夢中で全然聞いてなかった。

「なんだ？ ではない！ 貴様の名前はなんだと言ったんだ!？」

「俺？ 俺は零だけど、なんだ？」

「私だけが名乗るのはおかしいだろう！ . . . . . ふむ、レイか。」

「はあ、てかなんであんなところで倒れてたんだ？」

まあ、この子がエヴァと解った今、聞かなくても大体予想はつくが . . . . .

「う！？ それはまあ、なんだ . . . . . ちよつと散歩をしようと思って出かけたら、道に迷って疲れて倒れてしまったんだ。」

「嘘だな。」

「う、嘘ではないぞ！」

確かに疲れたという点だけは本当だろうな。

「じゃあ、なんで最初口ごもったんだ？」

「そ、それはだな!？」

(すこし意地悪だったか? . . . . .しかし)

オロオロと一生懸命言い訳を探すエヴァ。  
. . . . . なかなか可愛い奴かも。

(こんなに小さいのに吸血鬼の真祖か。)

恐らく兵士たちなどから逃げてきたのだろう。

(となると. . . . .)

「おい、エヴァ?でいいよな。  
なんで倒れてたかはいもういい、結果的に無事だったんだからな。  
それで、だ。エヴァはこれからどうするんだ?」

「え?」

「もう夜遅いが自宅に帰るか？」

「っ!？　・・・・・・・・家には帰りたくない。」

・・・・・・・・やっぱりか。

「そうか、ならここにいろ。」

好きなだけいてくれて構わない。」

「なんで!？」

なにを言ってるんだ？とでもいう表情を見せるエヴァ。

「帰りたくないんだろ？　どうせここで無理矢理帰らしても、家には行かないことは目に見えてるからな。」

なら森の中でまた倒れてもらうより、ここで気が住むまで自由にすればいいさ。

部屋も空いてるしな。」

本音を言うところのままエヴァを帰らせる気はなかった。

今のエヴァにはここ以外の場所は危険すぎる。

「……………ありがとう。」

「ああ。」

それじゃ、今日はもう遅いしとりあえずここまで。」

「う、うん。」

今日はもういいだろう、詳しいことはまた明日考えれば。」

「よし！ それじゃエヴァ、お前は風呂入ってこい！」

「え？」

「服は着がえさせてもらったが、身体には何もしてないからな。」

そう。服は確かに綺麗なのを着せたが、いかんせんこんなに小さくても女だ、むやみやたらに身体に触るわけにはいかなかったので拭くことはせず、身体に泥がついたままなのだ。

「あれ？ ふ、服が変わってる!？」

「泥だらけだったからな。」

「……………だ、誰が変えたんだ!？」

「俺以外いないだろう?」

「……………もしかしなくても、私の服を脱がし肌を見たと!？」

「そりゃ見えるだろう? 着がえさせたんだから。」

別に裸などサタンで見慣れてるしな、最初は苦労したが……………  
なにせ

「寝るときに服を着るとか締めつけられてる感じがして、苦しくてやだ!」

とって全裸で動きまわってたからな。

というわけで、そんなサタンと変わらない体型のエヴァの肌を見ようが何の気持ちも起こらない。

何の気持ちも起こらないってなんだよ。

むう………確かにエヴァも今より、もう少し………。  
いや、かなり成長していたら流石の俺も思うところがあったかもし  
れないが。  
うん、流石にありえない。

「な、ななな!!!!」

「ん？ どうかしたか？  
早く風呂入ってこいよ。」

「ぶれけるにゃ—————!!!!」

「ええ!?!」

そしてなぜか罵倒された揚句、殴られた俺だった。  
……わけからん。

## 第六話 少女（後書き）

ちよつと簡単に書きすぎたと反省してます……。

主人公の原作知識を説明しますと、元からそんなに読んでいたわけではないので、おおまかに覚えてる感じです。  
とりあえず全巻読んだことはありますが、そこまで覚えていません。

第七話 吸血鬼（前書き）

様々な書き方に挑戦中です。

## 第七話 吸血鬼

「sideエヴァ」

私がこの家に来てから数週間が経っていた。

(私はここにもいいのか?)

こんなに経つというのにレイは私を追い出そうとしない。  
それどころか理由さえ、あの日を最後に問われることはなかった。

(危険かもしれないのに……………)

警戒は怠ってない……………はず。

(早く出て行ったほうがいいに決まってるのに!)

いつも感覚を研ぎ澄ませながら過している。

(私がここにいると、『レイ』が危ないって解っているはずなのに！)

なぜだろう、なぜかここにいます。

(安心して、いるのか?)

ふと蘇るあの時の記憶。

(.....怖い。)

絶対に.....絶対に『あいつ』に見つからないようにしないと。

(あいつに、私の人生を狂わしたあいつに.....。)

始まりは誕生日。

10歳の誕生日の日だった。

その日から私の人生は狂った。

比較的裕福な所に預けられ、不自由のない生活をしていた私。  
幼いころから大人達の汚い所を見ていた。

『なに！？ そんなこと言ってる暇があったらさっさとその尻拭い  
をしてこい！！』

普通の人よりは見ていたから。

『もし知られるようなことがあれば殺せ。』

気付いたら、話し方や考え方などは子供のそれでは無くなっていた。

しかし、そんな私でもその時起きた出来事にはただただ理解できな  
く。

『綺麗な娘だな？』

『誰だ、貴様は？』

『ほお、我を前にしても怖気づかないのか、すごいな。』

そいつは私の知っているどの人達よりも危険な雰囲気を纏っていて。

『貴様はなにを言ってるんだ？』

『は、ハハハ！！ 気にいったぞ、小娘！』

討伐隊を撒きながらも、わざわざ居すわったかいたあった！！』

そいつの目は黒く濁っているような感じで。

『そうと決まれば早速始めよう、早くお前が欲しい!.....  
お前ならきつといい【吸血鬼】になる。』

『は?』

確かに聞こえたその単語。

『大丈夫だ、少しチクツツとするだけだ。』

『なにを!.....!?!?』

首筋に立てられた歯。

『これで終了だ。』

『な、なにをした!?!?』



『お前はこの時より【吸血鬼の真祖】となった！  
さあ！ 我と共に来るのだ！！』

抑えられない……………。

『どうした？』

……………力。

『うううあああゝあゝっ！！』

『な、なに！？』

私は駆け出した。

その場から一刻も早く逃げたかった。

立ち止まることは許されなかった。

溢れる力が抑えられなかった。

どれくらいの間走っていたのだろう。

いつの間にか森の中にいた私はとうとう力尽きて倒れてしまった。

『なんだ？』

だれかの足音が聞こえる。

逃げなくちゃいけないのに身体が動かない……………そして。

『女の子か？ 外傷は……………ないな、服も汚れてるだけで襲われたという形跡は見当たらないし、道に迷ったか？』

……………こんな場所で倒れてるところを、熊にでも見つかった

スプラッタなことになっても可哀想だし、とりあえず保護するか？』

私の意識はそこで途切れた。

「side 零」

エヴァと暮らし始めて数週間、警戒はしているようだがここを離れるつもりはないようだ。

「ひとまずは、よかったかな？」

最初の頃なんてもう酷かった。

「うつるさい！ 来るな！ 近寄るなあ！」

「いや！？ なにもしねえよ！」

「嘘だ！！ 寝ている私を脱がしたくせに！！！」

「だから！ 不可抗力だって！！！」

「犯罪者は皆そう言うんだ！！！」

「激しく意味不明だ！！？」

とこんな感じに近づけさえしなかったが、時間が経つにすね。

「な、なあ？ 私がなぜここから出て行かないのか聞かないのか？」

「だから、もう興味がない。  
気が済むまでここにいろ。」

「む。そ、そうか。」

なあ、なにかすることはないか？」

「え？」

「か、勘違いするな！ なにもしないで居すわってるなんて私のプライドが許さないだけだ！」

「あ、ああ。」

じゃあ、これテーブルまで運んでくれないか？」

「まかせろ！」

みたいな感じに徐々にだがエヴァの態度が緩和されていった。

そんな生活を送っていたここ最近だが、町に行くと気になる噂が広がっていた。

『吸血鬼が若い娘を探して襲っているらしい。』

(おかしいな。)

吸血鬼騒ぎの犯人というか、吸血鬼にあたる人物はエヴァではなかったのか？

しかし、確かエヴァは女子供に手は出さない主義だった気がしないでもないが……。

(違うやつがいるのか?)

エヴァは薪を拾いに行く時くらいしか外にでない、俺もあまり遠くに行くなと言ってるし。

(そういえば、エヴァは誰に吸血鬼にされたんだ?)

10歳の誕生日に吸血鬼になったという設定だった気がするが、確かに今のエヴァから感じる魔力は明らかに人間のものではない。

(んー。)

結界張っておくか……。

「sideエヴァ」

「今日は薪を拾いに行くぞ！」

ある昼下がり、確か薪が切れかかっている気がしたので今日の仕事はそれに決めた。

「おお、頼むぞー。」

グデーンと寝っ転がりながら答えるレイ。

「任せておけ！ この私にかかれればこのくらいの仕事、1時間もい  
らん！！」

「おお、頼むぞー。」

ずいぶんとやる気がないみたいだが、まあ、いいだろう、私は私の  
仕事をこなすまでだ。

「では、行ってくるぞー！」

「あまり遠くに行くなよ。」

「解っている！」

いつも外に行く時は決まってこのセリフを言うレイ。

（私を子供扱いするな、まったく。）

実際子供なのだが。

「あまりいい木がないな。」

いつも拾っているポジションを散策しても、なかなかいい木が見つからないでいた。

「違うところを探してみるか。……………しかし。」

木を探しながら私は思った。

「……………完璧にこの暮らしに馴染んでしまった。」

近くの木に手を置き、うなだれる私。

「だけど。」

（レイとこのまま暮らすのも……………。）

いいかもしれない。  
そう思ってしまった。

幸いレイも私のことを嫌ってはいない………はず！

（ふ、フフフ。）

顔が自然とにやける。

「って！ そんなのではないぞ!? 断じて違う!」

（な、なにを言ってるのだ私は!）

だが、レイの姿が頭に浮かぶ。

肩よりは短いが、少し長めの髪は黒く。

180cmはあるだろう引きしまった身体。

そしてそれが不格好にならず、見るものを引き込むような均整のとれたカッコいい顔。

「………フフフ。」

顔がにやけてしまう。

(うわああああ／＼)

羞恥心で頭が一杯になった。

「もう止めだ止めだ！！！」

あいつのことを考えるのは止めよう。

「って、ここは何処だ？」

先のことを考えず進んでいたら、見知らぬ場所にいた。  
来た道に戻ろうと後ろを振り向くが。

「……………」

木が広がるばかりでなにも解らない。

(ど、どうしよう……?)

完璧な失態を犯した。

（あまり遠くに行くなとあれほど言われてたのにー！）

自分が恥ずかしくてしょうがなかった……。

「うう……。」

薄暗い森の中、吹き抜ける風が木々を揺らし不気味な音鳴らす。

「ひい！……びびってなんかないぞ！」

ガサ

「ひゃあ！！！？？」

いきなり後ろからの物音。

「……やっと見つけたぞ」

「レイ？」

じゃない？

けど、この声に聞き覚えが……ある！？

「やっと見つけたぞ！エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル！」

「き、貴様は！！」

「真祖にしてやった瞬間いきなり逃げるとは。

どれだけ気配を探っても全然見つからない、一体何処にいたのだ！」

「してやっただと！ お前が勝手に私をこんな身体に変えたのだろ  
う！！」

「我と同じ、魔法世界最強種である真祖だぞ！」

「そんなのは知らん！」

「ふっ、まあいい、来い！」

腕を握られ強引に引っ張られる。

「や、やめろ！ 離せ！！」

「うるさいぞ！おとなしくしろ！」

そういった後、男は何かを呟いた。

「れ、レイ……………」

いきなり瞼が重くなり、意識が薄れていった。

「眠らせてただけだ。」

……………しかし、レイとは誰だ？」

「……………じゅめん、なさい。」

視界が黒く染まった。

## 第七話 吸血鬼（後書き）

エヴァとレイの二人の視点を書かせて頂きました。  
違和感がなければいいんですけど……。

こういった書き方はこの後もしていきます。  
ご了承ください。

## 第八話 感情

「……………遅い。」

エヴァが出て行ってから既に数時間が経とうとしていた。数時間くらいなんだ、と思う人もいるかもしれないが、ここら一带はご存じの通り、森に囲まれてる。したがって薪拾いくらい2時間ないし、エヴァが言っていたように1時間くらいで終わってしまう。

「はずなんだが……………」

いつもならもう帰ってきてもいいはずだ、しかしこんなに遅いということは……………。

「なにかあったか？」

悪い予感がする。

「……………今日は全力でだらける日だったんだけどな。」

だから、朝から全力でだらけていたんだが……………。

しかし、そんなことは言ってもらえない。

こういう第6感が働いたときは今までの経験上行動した方がいい。

「なにもなければいいんだがなあ。」

こんな軽口を叩きながらも、何故か装備を整えてしまう。  
なんとなく持つて行った方がいいと感じたからだ。

「吸血鬼騒ぎもあるしな、用心にこしたことはないよな。」

仮契約カードと大鎌を持つ。

「ふう、今日は忙しくなるかもな。」

どうしてこんな感情が湧きあがってきたのか解らない。

「ただ道に迷っただけというのが理想なんだけど。」

ほんの少し一緒に住んでいただけなのに。

「まあ、もし本当にエヴァの身になにか起きていたら。」

ただ情が移ってしまったただけなのか？

「いや、それ以上に傷つけたなんて奴がいたら。」

こんな感情は初めてだ。

「そっだな……………」

黒い感情がせり上がってくる。

「ハハ……………殺してやる。」

初めての憎悪。

「といつても。」

ただいま森の中を搜索中。

「真面目に道に迷っただけかもしれないからな。」

先走ってもしょうがない。

だが。

「………いない。」

どうするか、結界の中から出ていったのか？」

エヴァが来てからだだが、この森に無駄な来客を防ぐため、俺の家を中心にかなり大きめな認識阻害系の結界を張っておいた。

この結界の中にあるものに用がある奴は、ここに来ることはもちろん、探知することもできない。

だから、エヴァにはこの結界から出ないように、あまり遠くに行くなど言っていたのに……………」

「勘弁してくれ……………」

この結界の外なら、多分エヴァはもう兵士に捕まっている可能性が高い。

兵士たちがこの森の中をウロウロしていたことは知っていた。

……………一刻の猶予も許されないかもしれない。

「『来たれ』。」

もう樂觀してる場合じゃない、全力を出す。

リン

アーティファクトから音が鳴る。

あの時は解らなかったが、この音はアーティファクトが始動した場合。

図。研究の結果、このアーティファクトは思った通り時間に作用する代物らしく、かなりの応用が効く。

まず。

「エヴァの行方を……………」

空間を限定して過去の映像が見れる。

これを利用して、家から出たあとのエヴァが行動したルートを進る。

「最初はやっぱりいつもの場所か。」

エヴァの後をついていくといつものポイントを回っていたが、徐々にエヴァの動きがおかしくなってきた。

「なんで木に手をつけて落胆してるんだ？」

この効果は映像だけで、音は流れないので動きだけで判断するしかないが、あまりにも意味不明だった。

いきなり頭を振りだしたと思えばニヤけ出したり、かと思えばまた

頭を振りだしたりした。  
その動作が何回か続くと落ち着きを取り戻したらしく、辺りを確認し始めた。

「がつつり出てんじゃねえか!!!」

結界の外だった。

エヴァはオロオロとし始め、周りの音にビビッているのだろう、なにかと焦っていた。  
またそんな動作が何回か続くと、エヴァがひと際大きな動きをみせた、すると。

「なんだ？」

エヴァの後ろから何者かが現れた。

「兵士では……ない!？」

現れたのは兵士ではなかった、俺の見たことのないマントを羽織った男……。

そいつの目的はエヴァだったのだろう、口論を交わしたあとエヴァを眠らせどこかに連れていった。

「あいつが。」

恐らくだが兵士達が探していた吸血鬼だろう。

「エヴァじゃなかったのか。」

そしてそれと同時に……………。

「……………エヴァを吸血鬼にした犯人。」

エヴァを真祖にしたやつだ、生半可な奴ではないことは確かだ。

「力は真祖クラスか？」

.....」

ハハ、関係ないな。

リン

森には誰もいなくなった。  
後に残るのは響き渡る高い音だけ.....。

## 第八話 感情（後書き）

主人公のエヴァに対する感情が少しでも解るように書いてみましたが、これがなかなか難しい。

展開が早い気もするので説明が足りないところも多くなっているかもしれないです……

第九話 真祖（前書き）

更新が思ったよりも遅くなってしまいました、すいません……

今回は言葉足らずな点が多く見られるかもしれませんが、文章の魅せ方、表現の仕方が解らなく、うまくかけませんでした。

## 第九話 真祖

「sideエヴァ」

頭が重い……………。

……………身体が重い。

「ん……………」

視界がぼやける。

「おお！ やつと目覚めたか！！」

だ……………れ？

「なかなか起きないからな、待ちくたびれたぞ。」

段々と……………段々と頭が冴えて来る。

そして……………。

……………思い出す。

「き、貴様!!?」

会いたくない奴に出会ってしまったこと。  
意識がもうろうつとし、そこからの記憶がないこと。

「じ、ここは何処だ!」

ガシャン

重い音と一緒に自分がベットの上に寝かされ、手枷をはめられてる事に気付く。

「つく……………」

「あまり暴れるな、大事な身体に傷がついたら困るだろ。  
まあ、そんな心配など無用だとは思うが。」

「なにを!?!」

「解っているだろう。」

お前は我と同じ真祖の吸血鬼になった。

その程度で負うような傷などすぐに完治する。

お前とて、今までの自分とは違うということを感じているはずだ。」

「.....」

出来れば信じたくなかった。

自分の身体に起きている変化を。

「成り立てのお前はまだ自分の力の使い方がわからない、そうだろう?」

抑えきれぬ力、10歳の少女がクツキーを砕くくらい簡単に石を握り潰せるわけがない。

「身体の芯から、震えるような衝動に駆られたらどう?」

近くによるものを襲いそうで怖かった。

「何処に隠れていたかは知らんがこの数週間、匿ってもらっていたか？」

その家の者に多大な迷惑をかけていたんじゃないのか？

八八……一人や二人殺したか？」

「そんなことはないっ!!」

「ほお、思った以上に身体に馴染んでいるようだな……。  
素晴らしい！それでこそ我の選んだ女だ!!」

「ふざけるなっ！早くこれを外せ!!」

その済ました顔を引き裂いてや……る？

(……なにを思ってるんだ私は??!)

「どうした？我が憎いか？  
そんなことはないだろう？

お前を人間などという下等な生き物を超越した存在にしてやったの  
だぞ？

ありがたく思え。」

……おかしい。

「そんなこと頼んでなんかいない！！」

感情が、衝動が抑えられない。

「ハハ、随分と反抗的だな。  
まあいい、時間などいくらでもある、我等に寿命などと言つ鎖など  
無いのだからな。」

胸の奥から、身体の芯から震えるような力が抑えられない。

「じっくりだ、じっくりとお前を我好みのペットにしてやる。」

目の前のこいつを……。

「ロシテヤリタイ。」

「うあああああ　っっっ……！」

バキッ

「なにっ!？」

鎖を力任せに引きちぎり、目の前の……私を狂わしたこいつを!

「クロスッ!！」

懐に一瞬でもぐりこむ、右手を顔に向けて力いっぱい振り下ろすが。

「す、素晴らしい、お前は本当に我を喜ばしてくれ!！」

相手は簡単に、本当に簡単に避ける。

私の全力の不意打ちを、何も知らない無知な私でも、絶対に避けられないと思う渾身の一撃を。

「だが……少し調子に乗っているようだな？」

「っが!？」

背中から頭に鈍く響く痛み。

なにをされたか解らない。

気付くとただ床に倒れてた。

「まずは我に手をあげないようにする必要があるな？」

「うう、離せ……………」

髪を掴まれ、持ち上げられ耳元で囁かれる。

「言うことを聞かない子供は、やっぱり体で覚えさせるしかないな。」

この後のことは私も覚えてない、壁に投げつけられてからその後の記憶を、覚えてない。

「side 零」

辿る。

気配を。

これまで磨き上げてきた神経を研ぎ澄ませる。

「どどこだ、エヴァー！」

いや、落ちつけ。

冷静に。

「一瞬……一瞬でもエヴァの気配がどこにあるか解れば、も  
うあとは何も考えることはない。」

「……………いた。」

転移陣を展開。

「無事でいてくれ……………エヴァ。」

エヴァは城の中にいた。

「古城か？」

かなりでかいな、こんなの外から目視できないわけがない。

「……………結界か。」

いや、今はそんなことよりエヴァを。」

エヴァはこの城の中心くらいのところか？

エヴァの居場所が特定できた今はもうなにも待つことはない。

「・・・・・・・・この先か。」

ドアを蹴破る。

「む、何者だ！？」

そこにいたのはあの時映像でみた男。  
間違いないこの男が・・・・・・・・。

「エヴァはどこだ！！」

「ハハ、貴様がエヴァを匿っていた人間か？  
よく我の目から逃れたものだ。  
しかもただの人間ときたか・・・・・・・・。」

「俺はエヴァはどこだって聞いてんだよ！」

「聞いてどつする？」

ハハ。まあ、答えるくらいならしてやるつ、そこにいるだろつ？」

「!?!」

そこには壁に磔にされたエヴァの姿。

服はボロボロにちぎれ、身体には無数の傷跡が見えた。

リン

「……………なにをした？」

「ハハ、ただ生意気な小娘を痛みつけたに過ぎない。」

「なんだと？」

「思った以上に手こずらせてもらったがな、真祖といえど所詮は成り立てだ、齢数百を超える我にとっては赤子に等しかったがな。」

こいつは、なにを言ってるんだ？

「主人はちゃんとペットの躰をしないとなめられるからな。こいつは私の従順なペットになってもらわないと困るんだ。」

頭のどこかで線が切れた音がした。

「もういい黙れよ。」

なぜだろう？

熱くなっていた心が徐々に冷めていく。

「どうしたこいつのことが心配か？

なに心配するな、気絶しているだけだ。

少々殴っただけでそれ以外は何もしていない、直に目を覚ますぞ。」

自分でも驚くくらい冷静になっていく。

「それじゃ、それまでに終わらせてやるよ。屑が。」

「ハハ。なにを終わらせるんだ小僧？」

「お前の人生をだよ、もういい無駄口叩くなエヴァが起きちまう。」

こんな姿、出来れば見せたくない。

「普段ならこんな安い挑発を受けたら、痛みもなく一瞬で殺してやるが。」

「……………我は今、非常に機嫌が悪くてな。」

「楽に終わらせてやると思うなよ！」

男から放たれる強烈な殺気。

「早く来いよ。」

「魔法世界最強種が真祖【ハイ・デイルイトウォーカー】に喧嘩を売ったことを後悔させてやる!!」

目の前から消える吸血鬼。

「まずは足からだ!!」

「おせえよ。」

影を利用したのだろう。

足元に現れた吸血鬼を蹴り飛ばす。

「なっ!?!」

「おいおい、どうした?」

そんなものかよ【吸血鬼の真祖】って奴は?」

「つく！ なめるなよ小僧っ！！」

『魔法の射手 連弾・闇の50矢』！！」

吸血鬼の手から黒い弾丸が現れ、俺に向かって放たれる。

「流石だな、無詠唱でこの量にこの威力か。」

「軽口を叩けるのも今のうちだ！！」

『百の影槍』」

影が槍となり、その鋭い切っ先が弾丸の後も容赦なく攻める。

真祖の名に恥じない、吸血鬼の猛攻が襲いかかる。

その猛攻は部屋全体にダメージを与えた。

逃げ場など無い、壁には穴が空き粉塵が空を舞う。

「ハハ、痛みつけてから殺そうとしたのだがな、どうも人間相手は加減が難しく困る。」

リン

「なんだ？……この音は！！！！？」

吸血鬼の片腕が飛び鮮血が滴る。

「な！！？ 小僧！！ なにをした！！！！！！？」

「ああ？ ただ切りつけたただだよこの鎌で。」

「あ、ありえん！！ 人間ごときの武器で我の障壁を超えられるわけがないだろう！！  
それ以前になぜあれだけの攻撃を喰らい無傷なのだ！？」

「障壁？ 障壁展開してたのか？？ もろすぎて解らなかったわ。  
あの程度寝ていても避けられるな。」

「なにをつ！！！」

「どうした？もう来ないのか？  
なら今度はこっちの番だぜ？」

「なめるなあっつー！！！」

両者の攻め合い、しかしそれは傍から見ると一方によるただのいじめにしか見えなかった。

「なぜだ……なぜ我の攻撃が当たらないんだ！？」

「遅えに決まってるからだろ！」

吸血鬼の身体が血に染まっっていく。  
真祖の再生は最早追いつくことはなく、零の斬撃により皮膚が裂かれ、片足を無くし、飛び散る体液は吸血鬼を見る者無残な姿に変えていった。

「うう……ああ……。」

「すげえな真祖って奴は、これでも死なねえのか？  
やっぱり心臓をつかなきゃ駄目か？」

「レ．．．．．イ？」

「!？」

エヴァが目を覚ましたか。

「レイ？ 本当にレイなのか！  
よかった．．．．．じゃない、早くここから逃げろ!!  
殺される．．．ぞ??？」

エヴァは俺の目の前に倒れているボロボロの吸血鬼に目を向けた。

「なんだ．．．．．それは。」

「……………エヴァ。」

「まさか、そいつと戦ったのか？」

【吸血鬼の真祖】と!？」

「ああ、すまない。お前が目覚める前にケリをつけたかったんだが……………」

「ば、バカ者が!! どうして……………どうしてそんな危険なことを。」

しかもその姿……………」

「……………エヴァのことが心配だったからだよ。」

「えっ?」

ツガ

「動くなっ!!」

目の前に倒れていたはずの吸血鬼は、いつの間にかエヴァを抱きかかえ壁へ身を預けていた。

(な!?! 影を伝つての転移魔法か……………)

「お前のような人間がいたことは全くの計算外だった。これは我のミスだ。

しかし、我はこんな所で死ぬわけにはいかない!!」

「エヴァを人質にするつもりか？」

「こんな下等なことはしたくなかったが、止むを得ん。」

「屑以下だな……………」

「黙れっ!! 一歩でも動いてみる、小娘の命はないぞ!!」

リン

「またこの音か!?　なんだ、なんなんだ一体!?!」

「……………知りたいか?　なら、冥土の土産に教えてやるよ。  
地獄に行ったらサタンにでも伝えてくれ。」

「なにをいつてるんだ?……………ツグ?!?!?!」

エヴァを抱えていた吸血鬼のもう片方の腕が身体と切り離された。

「え?」

驚くエヴァを自分に引き寄せ、比較的安全な場所まで離れる。

「な、なにを……………した。」

「俺のアーティファクトの能力だよ。」

「アー……ティファクト？」

「【虚無の懐中時計】

能力は体内外問わず空間の解放と縛り。

……簡単に言えば要は【時】を操る。」

『自分を中心とした半径5 kmの体内外、空間の解放と縛り  
解放は時を早める。』

縛りは時を戻したり、遅くしたりなど。

ただし、直接死に繋がる使い方は出来ない

寿命を早めての老衰（しかし寿命を遅くすることは出来る、不老にすることが可能）。

心臓など止めるなど。』

「な、そんなもの……聞いたことが。」

「そうだな、使っているとつくづく思い知らされる。」

このアーティファクトの恐ろしさを。

(エア……これもお前が……。)

「ば、馬鹿を言うな!! 人間の分際でそんなことが!!」

「実際に体感しただろうか？  
気付いたら血だらけの身体。  
当たらない攻撃。」

「うう……。」

「お前と話すことはもうない。  
……結構長引いたけどな、もう終わりだ。」

動くことの出来ない吸血鬼に鎌を振り下ろす。

「待って!!」

エヴァの叫び声、鎌の切っ先は吸血鬼の寸前で止まり、俺はエヴァの方を見る。

「ど、どうした?」

「私が………そいつは私がやる!」

エヴァの悲痛な叫びとその言葉の意味を理解する。

「……………」

「レイ……………ありがとう。」

エヴァは俺の鎌を取り、真祖に向けて振り下ろす。

「お前が……………お前さえいなければこんなことには……！」

【吸血鬼の真祖】は叫び、そして……………。

「これで良かったのか？」

エヴァの後姿は、とても……………とても小さくて。

「ああ……………」

こいつは、私の手で終わらせたかった。」

だけど、とても大きく見えた。

「そうか。」

震える肩はとても悲しく見えて。

「レイ……………」

そして俺は。

「なんだ？」

10歳の少女が背負うにはあまりにも重いその運命を。

「私のせいで……いや、うん。  
なんでもない。」

少しでも軽くしてあげれるのならばと思った。

「そうか。」

後ろからエヴァを抱きしめる。

「レイ？」

レ……イ。 う……う……う……う……うああああん……！」

泣き叫ぶエヴァを身体で感じながら、俺はただただ泣きやむのを待

った。

その場に残るのは俺とエヴァと………血だらけの肉塊だけだ  
った。

第九話 真祖（後書き）

どうだったでしょうか、なにも疑問に思わず読んで頂けたのならいいのですが……。

アーティファクトをチートにし過ぎて生きるのが辛い。

## 第十話 疑問（前書き）

やっと第十話、よく思いつきでここまでかけたものだと思います（多分キリのいい数字ごとにこのセリフは繰り返されると思います）。

ありがとうございます！

そろそろ旅立ちたいですね……。

## 第十話 疑問

あれからまた数週間が経った、最初こそ無口だったエヴァも、今と  
なつては結構元気になった………と思う。  
のだが、それと同時に最近気になることが二つほど出来た。

「なあ、エヴァ。」

「ん？ どうした？」

ニコニコといった表情で俺の言葉に耳を傾けるエヴァ。

「あ、ああ。この皿をそっちに持って行ってくれ」

「よし！ 任せろ！！」

私が完璧にこなしてやる！」

「気をつけるよー。」

「よし持って行ったぞ！ 褒める！！」

「おお、よしよし。」

「フフフ、もっと撫でろ！……………抱きしめてもいいんだぞ？」

「え？　なんか言ったか？？」

「な、なんでもないっ！」

「一つ目は懐いてくるようになったことだ。  
いや、懐いてもらうぶんには全然いいことだ！  
むしろオールオーケーだ！！  
喜んでいいことなんだが……………」

「なあ、レイ。　なにかすることはないか？」

「え？　それじゃあ、これ頼めるか？」

「任せろ！」

「レイ、私も魔法を使ってみたい！」

「えっ？」

「教えてくれ！」

「ええ！？」

「レイ！見てくれこの服を！！」

「おお、かわいいな、自分で縫ったのか？」

「あそこのクローゼットの中にあつたものを参考にした！」

「あそこ？」

エヴァが指をさした方向を見ると。

( ああ、サタンの…………… )

フリフリの服のオンパレードだった。

「こつこつというのが好きなのだろう?」

「ええー。」

「き、嫌いなのか!？」

ウルルと涙を溜めるエヴァ。

「い、いや! 好きだぞ!」

「そ、そうか! よかった……………好きか、フッフ、そうか好きか。」

(俺のじゃないんですけどね！)

といった具合にやたらとなんかこう来るものがある。

俺の思い過ぎなのだろうか………？

そしてこの二つ目を踏まえて、二つ目の疑問が浮かんだ。

「なあ、エヴァ。」

「どうかしたか？」

「ああ、一つ聞きたいんだが、いいか？」

「いいぞ、なんでも聞いてくれ。」

ソファーに座り、本を読みながら俺の問いを聞くエヴァ。  
そして俺は気になることを聞くことにした。

「エヴァはいつまでここに居るんだ？」

そう、エヴァ来てからかれこれもう一カ月半は過ぎてる。  
そのことを聞くと。

「えっ!?!」

バサッ

あ、本落とした。

シーン

エヴァが固まった。

「え、エヴァー？ エヴァさん？」

「ハッ！？ な、なんだ今良くないことが聞こえたのだが、私の耳が悪かったのかもしれない、も……もう一度頼む。」

真祖が耳悪いつてなんだよ。

「いや、だから。」

エヴァさんはいつまで俺の家にいるのかなあ？ と。」

ピキッ

い、石になった……。

「ど、どうしたんだ？」

ポンッと肩を叩いた。

「ね、レイ……。

お、復活したか？

「……レイは私がここにいと迷惑か？」

テンション低っ！！？

「い、いや！？ 全然迷惑じゃない！  
むしろ毎日が楽しくて幸せなくらいだ！」

「そ、そうか！ ……では、なんでいきなりそんなことを  
聞くんのだ？」

最近魔法を覚え始めたエヴァ。

闇と氷系が得意らしく、部屋全体に冷たく重い魔力が充満し始めた。

「ええとだな、エヴァが来てからもう一カ月半が過ぎようとしてる  
だろ？」

「ああ。」

「それでだな、その、なんだ。  
エヴァを追っていた吸血鬼もいなくなったわけだし、エヴァは今、  
なにも恐れることはなくなったわけだ。」

「ああ。」

………重え。

「だったらもう俺の家に居なくても自分の家に帰ってもいいんじゃないか？」

親御さんも気にしてることだろうっ？」

「ふ……………」

ど、どうしたんだ？

「フフ……………。そうか、私が邪魔になったんだな。すまない、気がつかなくて……………」

やべえ、なんかスイッチ入った！

こんなスイッチ原作にあったっけ！？

「ま、まあ、落ちつけ。

寒い、寒いから！」

エヴァの冷気で部屋に霜が張っていた。

「だけど、だけど！ お前が、レイが気が済むまでここに居ていいって言ったんだぞ！？」

「いや、確かに言ったなあ。」

理不尽だが、あのときは吸血鬼騒動の本人だと思ったからなあ。

「それに、あの人は私のことなんてどうとも思っていないさ。」

「あの人は？」

「ああ、私は幼いころ両親に預けられてな、これといって不自由なく良くしてもらったが、所詮は他人の子だ、そこに愛はない。

現に一月経つというのに私を探そうとする声は一つもないだろう？」

むう、確かに。

「誘拐や神隠しなど多々あることだ、私が居なくなっただとところで誰も悲しまん。

それに、私はもう人間でさえないしな……………」

「……………」

「でも、レイが出てけというなら……………しょうがないな。」

目に涙を溜めながら立ち上がるエヴァ。

「待て。」

エヴァの手を掴む。

「なんだ？」

「エヴァ、悪かった……………」

「……………レイ。」

今考えてみれば簡単なことだった、エヴァの境遇も考えるべきだった。

あの時誓ったはずなのに……………。

10歳の少女が背負うにはあまりにも重いその運命を。

……………少しでも軽くしてあげよう。

「まじ何も言わない、じじに屈すくな。」

「レイ。  
……うん。」

そっだな、そろそろ時期かもしれないな。

「旅に出よう!」

「はあ?」

もう心残りもなく気分が晴々としているある昼下がり。  
俺はそう切り出した。

「そうだな、俺も様々な所を見て回りたいし、フラフラと自由気ままに旅するのもいいが、やっぱり目的地がないと駄目だよな!」

「ちょ、ちょっと待て! いきなり何なんだ!？」

「よし! 目的地は俺の故郷、日本にしよう!」

「話を聞けえー!!」

エヴァの拳が腹に突き刺さった。

「ガッ!？」

あばらが、あばらがいった……。

「落ちついたか？ よし話を聞こう、詳しく話すんだ。」

「はい。」

俺は話した。

事の経緯もくそもないただの思いつきだと！

「キリッじゃない！！！！」

エヴァの飛び膝蹴りが顔に入った。

「ブフォアツツ！！！！？」

・・・・・・痛え。

「それで、いつ出発するんだ？」

「あれ？行くのか？」

「レイが行くというなら私は従うまでだ。」

「ええー。」

俺殴られ損たる絶対。

「はぁ……支度出来たら明日にでも行くつか。」

「うむ！わかった！」

## 第十話 疑問（後書き）

次回からは時間を早めて巻いていききたいと思います。

こんな作品だというのにPV・ユニーク共にここまでアクセスしてもらえとは、感激です！

## 第十一話 新たな旅立ち（前書き）

今回も短めです。

次回につなげるクッション的な何かです。

## 第十一話 新たな旅立ち

「それで、これからどうするんだ？」

そろそろここを出るか。

と俺の思いつきから、旅支度をして、よし出発しよう！とした矢先エヴァが疑問をぶつけてきた。

「とりあえず日本を目指しながら自由気ままにかな。」

「ふむ、ニホンとはなんだ？？」

「俺の故郷。」

でいいんだよな？

まあ、この世界の生まれでないにせよ日本には変わりないからいいだろう。

「おお！ そうか、故郷か！

それは近いのか？」

「遠いな。」

「どのくらいだ？」

「……知らねえ。」

「……なあエヴァ？ 距離なんて関係ないと思うんだ俺。」

「解らないのだな！？ 解らないんだろっ！！」

「うるさいなあ……」

「俺が知ってることと言えば。」

「エヴァ達で言う旧世界にあるよ。」

「旧世界？ 旧世界って旧世界か??？」

本で読んだことがあるぞ。 . . . . まあ、ちょっとだけだが。

「そうだな、その旧世界だ。」

「そうか、 . . . . とりあえずどれくらいを予定してるんだ？」

予定？

予定か . . . . そんなこと考えてもなかったな、前々からやりたかったことだし。

この時を逃したら二度と来ない気がする。

大戦が始まる前には余裕で着くとして、その間にエヴァを鍛えなくちゃか？

実際エヴァは原作で結構重要なポジションについてるしなあ。

ネギの師匠とかになってもらわないとか？

そのためには、まず『闇の魔法』は開発してもらわないと . . . . .

「 . . . . . エヴァの成長具合に応じてだな。」

「なんだそれは!？」

「少なくとも俺が、」

もう大丈夫だな！

って胸張って言えるくらいのレベルになってもらわないとな。」

「どのくらいかかるんだそれは!？」

「・・・・・・・・。。。」

「おい！」

「ハハハ！ 我々には永遠という名の命があるんだよエヴァンジェリン君!!！」

「ええ!?!?!？」

そ、そんなにかかるのか・・・・・・・・。。。  
と地面に手をつき落胆の色を浮かべるエヴァ。

「確かに私はそうだが、お前は私と違って人間だろう!?!?  
人間なんて百年と経たず死んでしまうだろ！」

「……そうだ……永遠なんて……ない。」

段々と言葉に元気が無くなるエヴァ。  
顔は下を向き、肩を震わせる。

(そういえば言っただけか?)

「……………エヴァ。」

「な、なんだバカ者!!」

「馬鹿者て……………。  
いいか、エヴァ?  
俺も言っただけですまなかったが、ちょうどいい機会だ聞いてくれ。」

「……………なんだ?」

「エヴァの言う通り、確かに俺は人間だ。」

ん? 人間だ? 人間だよな?? 人間なのか???

ええい、人間だ!!

「だからなんだ……?」

グスつと涙を流すエヴァ。

「けどな、俺も不老でしかも不死なんだ。」

「なにを！ 私を慰めようとしている嘘なら結構だ!!」

「いや、ホントなんだけど……。」

「そんな人間がいるわけないだろう!!  
バカ!

アホ!!

「……うわぁぁん!!」

泣いたー!?!?!

ええ? さっきまで何気ない会話というか、何処行くかの話だった

のに!?

「え、エヴァ?

嘘じゃない、ホントだ!

俺はホントは100歳を超えてるんだ。」

「100歳がそんな若い顔してるわけあるか!」

「不老なんだよー!!」

やべえ、話が進まねえ、エヴァってこんなに話の聞かないやつだったか?

それともなんだ? まだ10歳だからか? あと100年は生きないとの原作のエヴァみたいにはならないのか??

「わかった、信じられないなら今は信じなくていい。」

「………やっぱり嘘じゃないか。」

「今は、だ。」

エヴァ、俺は人の話をちゃんと聞いて理解する子が好きだ。」

「むっ！？ うう・・・私はちゃんと聞くぞ。」

「よし、いい子だ。」

エヴァの頭を撫で、目元の涙を指先で拭う。

「んっ・・・・・・・・子供扱いするな。」

「ハハッ・・・・・・・・今は確かに信じられないかもしれないけど、この先本当に外見も変わらず、何年経っても・・・・・・・・それこそ何百年もだ。」

俺がエヴァの前にいたら信じてくれるよな？」

「・・・・・・・・バカだな、そんなの信じるに決まっておるだろう。」

少しは元気になったか。

エヴァは微かに笑みを浮かべてくれた。

「・・・・・・・・それもそうだな。」

それじゃ、この話はとりあえず保留ということだ。

そろそろ行くか、エヴァ。」

ここが区切りかな。  
俺のことについては説明するより、実際に自分の目で見てもらった方がいいだろう。

「……………うん、わかった。  
……………それで、最初は何をするんだ？」

「エヴァの修行かな？」

「なぜだ!？」

## 第十一話 新たな旅立ち（後書き）

以下原作との設定の違いや誤字などを謝罪します。

まず誤字から。

アーティファクトなのですが『来たれ』じゃなくて『来れ』ですね、  
すいません。

ところどころ間違えています。

次に設定なのですが、エヴァンジェリンの「真祖」設定は、原作では咬まれてなったのではなく、自ら吸血鬼になった人のことという設定でしかも目覚めた時に吸血鬼となったことを知りますが、ここでは襲われ、咬まれてなったという原作ブレイクにしてしまいました。

これ以外に疑問に感じていることのある方がいたら申し訳ありません……

## 第十二話 旧世界（前書き）

修行パートに入りたかったのですが予定通りにはいきませんでした。

ここもクッションページみたいな感じですね。

## 第十二話 旧世界

「レイはどうやって魔法世界に来たんだ？」

「俺か？ 俺はだな、気がついたらいたんだ。」

嘘はついてないよな？

「えっ？」

「気がついて目を開けたら魔法世界にいたんだ。」

「そうか、大変だったんだな………つて、なんだそれは！！？」

「なんだそれは、と言われてもそのまんまの出来ごとだからなあ。  
てかあの時は色々あったから、そんな些細なことは考えなかったな。」

見渡す限り木しか見えない森の中に放り出され、不老不死と言われ  
てもいつ死ぬかわからなかったあの地獄の修行の日に、そんなこ  
と考えてもしょうがなかったしな………。

「色々といつと?」

「………生きるために必死だった。」

「ハハツ、レイほど強い奴がなんでそんなことに必死になる? それこそ些細なことじゃないか?」

「エヴァ、世の中には上には上がいるんだ。

よく覚えておきなさい。」

「………一体何に目をつけられたんだ?」

「神様……かな?」

悪魔もいたけど。

「神様??」

なんで神様に目をつけられたんだ?」

俺が聞きたいくらいだ!!」

「知らない、神様に目をつけられて。

「死なないように強くなつて頂きますう。」

「つて鍛えられた……。」

「は、ハハハッ！

レイの話しは……ククッ……聞いてて飽きないな!!」

クソッ、信じてないなこいつ。

「それじゃお前は神様に修行をつけてもらったから強いのか？」

フウと息を整えながら聞いてくるエヴァ。

「いや、元々のスペックでも十分強かつたらしい。」

「どのくらいだ？」

「あの吸血鬼程度だつたら素手で勝てるくらいか？」

「十分ではないか?!?!?」

バカにしてるのかお前は!?!?といきなりキレ始めたエヴァを適当にあしらいながら俺は歩を進めて行った。

最初の百年はこんな感じで毎日をだらだらと過ごしていきながら世界を巡っていた。

それと同時に、地理を把握してなかったせいで、なかなか旧世界へのゲートが見つからず右往左往していた。

「世界一周しよう!」

なんてふざけた事ことをしていたせいもあるのだが、なにせ旧世界のことを知ってる人がいないため、自力で探さなければならず。

魔力の密度が濃いところを中心に各地に転々としていった。

1度向こうについてしまえば、ゲートなど自力で造れるのだが、見つからない今そんな訳にもいかず、

「急ぐ必要もないしな。」

とエヴァに稽古をつけながら、ゆっくりと時間が流れていった。

金銭面などは俺が傭兵まがいのことをしていたので、全く困ることはなかった。

なにせそこらへんの賞金首などを始末するだけでいいのだから、こんな楽なこと他にはなかった。

そんなことがありながらもようやくゲートを見つけ旧世界に着くことができた。

最初こそエヴァが強くなってから、と思っていたのだが時間が経つにつれ、

「とりあえず長期滞在するところを見つけてから本格的に考えればいいか。」

という結論にいたりそれは旧世界で見つけることにした。

そして、そんな油断からか、旧世界である事件が起きた。

「なあ、レイ。

ここは何処だ？」

「ええと、勘だが。

ヨーロッパかな？」

ヨーロッパ……ヨーロッパか。

俺の計算が間違っていなかったら、今は確か15〜16世紀頃か？

(………なんか重要なことを忘れてる気がする。)

「エヴァ、とりあえず俺から離れるなよ。

なんか重要なことがあった気がする………から？」

(いねえ!?!?)

少し目を離した際にエヴァの姿が消えていた。

「エヴァ! 何処だ!?!?」

慌てて探す俺、すると遠くの方に人ばかりが見えた。  
嫌な予感がしたので行ってみると、人だかりの中心に十字架に貼り  
付けられている少女が見えた。

「なんだあれは？・・・ってエヴァー!!」

エヴァだった。

俺は人ごみをかきわけエヴァの方へ向かった。

すると変なおっさんが木に火を点けようとしてるところだった。

エヴァの力ならすぐにでも抜けられそうだが、人の多さのせいか下  
手に大きな力は使えないようだ。

(忘れてた！ この時代のヨーロッパは魔女狩りが行われてたんだ  
!!！)

しかし、なんでエヴァがいきなり捕まってるんだ？  
とおっさんを気絶させながら、疑問に思っている。

「レイ!!」

「エヴァ！」

「……なんで捕まってるんだ？」

「怪我してる女の子を治してあげようと治癒魔法を使ったら、それを見られて……。」

「なんでそんな時に限って苦手な治癒魔法を使うんだ……。」

「あれだ、レイ……助けてくれ。」

「ああもう、

『来れ』！」

【虚無の懐中時計】を出し周りの時間を止め、素早くエヴァを回収し逃げる。

「……すまなかった。」

「もう少し出来る子だと思ったんだがな。」

ここは危険だと判断し、エヴァを連れヨーロッパを出た俺とエヴァ。

「うう。」

申し訳なさそうにするエヴァ。

「はあ、二度とこんなことがないよう、日本に向かう前に一つやる  
ことが出来た。」

「というか決心した。」

「なんだ？」

「そろそろというか、遅いくらいだが、  
本格的に修行をする。」

「え!?!」

ここは南洋の孤島。

人は当然の如く一人も住んでおらず、俺とエヴァだけだ。

「今までは、まだ幼いし女の子で、プラス真祖ということもあり、俺もエヴァの修行は比較的緩く簡単なことしかしませんでした。」

「緩かったのか!？」

「しかし、今回の出来ごとでエヴァは少し注意力などが足りないということが解りました。」

「……………なんで敬語なんだ。」

「そこでいい機会なので、日本に行く前に、この孤島に居を構え本格的な能力UPを図りたいと思います。」

「はあ、だからなんで敬語なんだ。」

「これからの修行はマジでやります。  
もしかしたら途中で挫折するかもしれない。」

「そこまでなのか。」

むしろそこまでしないとこの先不安で仕方がない。

「……………覚悟はできてますか？」

「フフ……………愚問だ。」

それくらいの覚悟、真祖になった瞬間からある！」

「よし！ それじゃ始めるか。」

「ああ！」

第十三話 不憫（前書き）

修行パートエヴァ編です。

## 第十三話 不憫

「まず無意識のうちに障壁を展開出来るようになって、直接的なダメージは避けること。」

「ということで、障壁は常にそれこそ寝てる時にも張っておけ。」

「寝る時もか!?!」

「そうだ、ちなみに障壁を解いたらすぐ解るからな、その度に俺がエヴァに向かって『魔法の射手』を飛ばすから、覚悟しておけ。」

「なんだと!?!」

「よし始め!」

「ええ!?!」

こんな感じでエヴァの修行が始まった。  
元々、基本的なことは事前に学ばせていたということもあり、ある程度することは出来るようになっていた。

しかし、魔力の容量が強大で、それをいまいち使いこなすことが出来ていない（零基準）ので基礎からまたやり直している。

「まずは精神力の強化、次に術の効率化。

エヴァの戦闘スタイルは多分前衛を従者に任せ、後方で強力な術を放つ、典型的な【魔法使い型】だと思うから、正確で素早い魔法の詠唱は絶対だ。

「……まあ、無詠唱に超したことはないが、それはまだ無理だろう。

ほら、南の空に『魔法の射手』200本。」

「つく!?」

『氷の精霊 200頭 集い来りて 敵を切り裂け 魔法の射手  
連弾・氷の200矢』!!」

「障壁が解かれてるぞ!

『魔法の射手 闇の1矢』。」

目の前のことに精一杯なのだろうが、厳しくすると決めた俺は、そこを見逃すわけにはいかない。

「うづく………『氷盾』!!」

エヴァは相手の攻撃魔法を跳ね返す魔法の盾をだし、俺の攻撃をガードする。

「よし、そうやって周りの注意を怠るなよ。」

「ハア・・・ハア・・・。」

「次は俺との模擬戦闘を行う。」

「わ、わかった。」

エヴァはきついはずの修行に弱音を吐かず黙々とこなしていった。それどころか俺の見てないところでも努力を怠らず、50年経ち、プラス100年と経つと、もう修行する必要は無くなっていったが。

そんなある日。

「なあ、レイ。」

「ん、なんだ？」

今日の修行が終わり、夕食を食べていると突然エヴァが

「レイのアーティファクトを少し貸してくれないか？  
というか使っているところを見せてくれ。」

と言ってきた。

「ん？ 別にいいぞ？」

「おお、ありがとう！」

エヴァに【虚無の懐中時計】を渡す。

「すまない、少しやりたいことがあるんだ。  
明日からの修行は少し軽めにしてくれ。」

申し訳なさそうに言うエヴァに俺がNO！と言えるはずもなく。

「別にいいぞ。」

「そ、そうか！ 本当にすまない……。。  
あともう一つ私の頼みを聞いてくれないか？」

珍しいなエヴァがこんなこと言うなんて。

「なんだ？」

「出来るだけ多く魔道書とか、そういった関係の本などを集めてきてくれないか？」

「あ、ああ。」

さして問題はないな。」

「ありがとう！！」

それでは私は研究を進める！」

はあ、研究？

とそんな会話が行われた日から数カ月が経ち、俺はエヴァに言われた通り魔法世界に行ったり来たりしながら出来るだけ多くの魔道書などを集めて、エヴァに渡した。  
そして……………。

「出来た!!」

ここ最近自室に籠りっぱなしだったエヴァが突然大声をあげて出てきた。

「ど、どうした??」

「ふ、フフフ……………レイのアーティファクトを参考にしておかげで思ったよりも早く完成させることが出来たぞ。」

そういつて取り出したのは丸いガラスケースの中に建物の造形物が入ったものだった。

(これって、確か。)

「これはだな、聞いて驚くなよ！」

まずこの中に入ることが出来る！  
そしてこの世界での1時間は、この中では1日になる！！」

( やっぱりかぁ。 )

エヴァは魔法球を造り上げていた。

「これで修行がはかどる……そしてレイと過ごす時間が増える……フフ……フフ。」

なにか呟いている気がするが、ここは全力でスルーすることにする。

「そうと決まれば早速使おう！！」

「お、おう。」

まあ、なんだ……頑張れよ。」

「うむー！」

この魔法球を造ってから、エヴァの成長は凄まじかった。

「レイ！」

これを見てくれ！」

「ん、今度はなんだ？」

「ケケケ御主人コイツハ殺シテイイノカ？」

刃物を持った人形が現れた。

「フフ、驚いたか？」

私の従者、チャチャゼロだ！」

遂にチャチャゼロが出てきたか……………。

「次からはチャチャゼロを入れて戦闘をしないだろうか？」

「ああ、構わない。

むしろそっちの方がいいだろう。」

「フッフ、もしかすると私が勝ってしまうかもしれないぞ？」

「ナア、殺シテイイノカ？」

「そうだな、もし俺に勝てたら、エヴァの言うことを何でも一つだけ聞いてやるよ。」

どうせ負けないし。

「な！？ 本当か？」

絶対、絶対だぞ！！」

「あ、ああ。」

「何でもだな！

約束したからな！！」

いきなりのテンションの上がりようにビクビクする俺。  
とりあえず、今思っていることは……。。。

( 負けないうようにしよう。 )

結論を言うと負けることはなかった、前衛をチャチャゼロに任せて、エヴァは後衛で魔法を放つ、良いコンビネーションで、もうあの時の吸血鬼なんか相手にもならないだろう。  
しかし、そう褒める俺だが、エヴァは気に食わないらしく。

「なぜだ！」

「なんで勝てないんだ!?!」

「ケケ、御主人ノザコ。」

「うるさい、この人形が！ 燃やすぞ！」

「まあ、エヴァも強くなってるぞ?」

「私が強くなればなるほど、レイがどんどん遠くなっていく……」

「……」

（それが解るならもう大したものだと思うんだが。）

と思う俺だが、エヴァは強くなるためにずっと悩んでいた。

「前衛が一人だから駄目なのか？

いやしかし、もう何人いても変わらない気がするし………私が魔法しか使わないから？

もう少し近接も強くないと駄目なのか??」

やがて答えが出たらしいエヴァはまた自室に籠り始めた。

そして10年の月日が流れ。

「フフ……ハァーハッハ!!」

勝った、これでもう私の勝ち揺るがない!!」

と高らかに笑いだすエヴァが魔法球から出てきた。

「ど、どうしたんだエヴァは？」

「アタマガイカレチマツタミタイダゼ。」

チャチャゼロに聞くが何の参考にもならず、渋々エヴァに聞くことにした。

「え、エヴァ？」

なにがあつたんだ？」

「フフ、レイ！」

「な、なんだ!？」

ピシッと指をさされ俺は背筋を伸ばす。

「明日の修行は戦闘だ！」

次こそは勝つからな!!」

と言い放ちエヴァはベッドに倒れ眠りに落ちた。

「何なんだ一体？」

そして次の日。

「それじゃ、始めるぞー。」

今日の修行は昨日言った通り、模擬戦になった。

というか、もう修行なんてしなくても、エヴァはもう十分な力をつけているので、してもしなくてもいいのだが………。  
どうやら俺に勝つたらなんでも言うことを聞くという約束が、エヴァを向上させているらしい。

( まあ、強くなる分に超したことはないし、いいんだけど。 )

「レイ！ 今日こそは私が勝つからな！！」

「ああ、頑張れよー。」

「くう、そんなやる気のないセリフも今日で最後にしてやるからな！  
チャチャゼロ！！」

「アア、メンドクセーゼ」

エヴァとの戦闘が始まった。

「チャチャゼロ！

私の詠唱が終わるまで持ちこたえろ！」

「ハア、人形使イノアライ御主人ダゼ……………」

いつも通りチャチャゼロが前衛に出て俺の相手をする。

「それじゃ、行くぞ？」

『雷の斧』。」「

俺は雷系の上位古代語魔法で先制をする。

「つく、なんでそんな強力な魔法をほいほいとノータイムで放てるんだ！？」

チャチャゼロ持ちこたえろ！」

「ハイハイ。」

チャチャゼロはエヴァに障壁をはってもらい俺の攻撃に持ちこたえる。

「これじゃ、いつもと変わらないぞ？」

さっきまでの威勢はどうした？」

「むっ、すぐに吠えずらかかしてやる！」

『プラ・クテ ビギナル

来れ 深淵の闇 燃え盛る大剣！！

闇と影と憎悪と破壊

復讐の大焰！！

我を焼け 彼を焼け

そはただ焼き尽くす者

奈落の 業火！！！！

術式固定！！！！

掌握！

魔力充？ 「術式兵装」！！！！」

エヴァは本来放たれるはずだった魔法を手のひらの上で固定し、それを握りつぶして身体に取り込んだ。

(闇の魔法か！？ 完成させたのか……………。)

「ハハ！！ どうだレイ！！」

これで私は【魔法剣士】としても動けるようになったぞ！

これが私が完成させた【闇の魔法】だ！

そのポテンシャルはあの【咸卦法】にさえ引けをとらない！！」

確かに魔力を魂レベルまで融合させて、能力を倍にする闇の魔法。  
……………実際に見るとすごいな。

「いくぞ！レイ！！」

(これで、闇の魔法も生まれたしもつそろそろ大丈夫かな?)

数十時間に及ぶ戦闘となったが、結論をいっとやはり負けることはなかった。

元々築き上げてきたスペックがすべて倍になったエヴァは確かに強く、俺も流石に笑って戦える状況ではなくなっていたが、それでも敗北の『は』の字さえ見せなかった。

ちなみに負けたエヴァは。

「……………もうダメだ。」

と全身から負のオーラを出し、涙を浮かべながら魔法球の中へ入っていった。

「しばらく一人にしてくれ……………」

という悲痛なセリフが耳に残り、俺は

……………まずいことしたかなあ。(

と思い、エヴァを慰めるべく後を追う。

「sideエヴァ」

ベットの上に倒れ込み今日の出来ごとを振り返る。

（何故だ！？ 何故勝てないんだ！！）

私の長年かけて生み出した【闇の魔法】でさえまるで歯が立たなかった……。

「……遠い。」

レイが遠く感じる。

最初こそ、未熟な自分が恥ずかしく、いつも助けしてくれるレイの負担を軽く出来ればと思い頑張った。

レイと一緒に居る時間が嬉しく、修行なんて全く苦ではなかった……。

(……………だけど。)

自分が強くなる。

そう実感してくたび、レイの強さが解るようになっていくたび……。

『もし俺に勝てたら、エヴァの言うことを何でも一っだけ聞いてやるよ。』

(グスツ……………無理だ。)

このままでは私の目的が果たせず仕舞いだ。

真祖の私でさえここまで歯が立たないとすると、あいつに勝てる奴はもういないと思う。

そつだ、魔法世界最強種の真祖の私でさえ……………。

そう思うと段々と怒りが込み上げてきた。

「なんだ、なんなんだあいつは!!」

この私がこんなにも努力しているというのに、あいつはいつもいつも済ました顔で私を軽くねじ伏せる!!

チートだ! バグだ!! バグキャラだあいつは!!

そもそもホントに人間なのか!? それすら疑わしくなってきたぞ!!!

気がついたら100年以上経ってるし! だけど、あいつは当たり前のように笑顔で私の傍にいて……………くれるし……………。」

(……………はあ。)

百年以上だ。

あいつと出会ってからだと二百年以上経ってるかもしれない。  
なのに。

改めて思う疑問。

（私って魅力がないのか？）

確かに見た目は幼いかもしれない、しかしそれは仕方ない、いざとなったら幻術でもつかって大きくなればいい。

容姿は良い方だと自負してるし、しかも不老だ、この若さは絶対に老いることはない。

それなのにあいつは……………。

「……………決めた。」

エヴァはおもむろに立ち上がり拳を握る。

（もう勝利を収めての正攻法は止めだ！

私のプライドが許さないが、この際だ仕方がない。）

長年温めてきたこの策を実行するしかない。

(我慢は止めた、すぐにも実行してやる！)

「そうと決まればさっそく準備しなくては……………」

魔法球での時間が過ぎていく。

## 第十三話 不憫（後書き）

### 次回予告

エヴァの策略にはまった主人公！

エヴァの目的とはなんなのか？

何も理解できない主人公は、ただただ無事を祈るのみ???

次回「秘められた想い」

多分マジでこの題名でいくと思います。

第十四話 秘められた想い（前書き）

空きました。

これでもかというほど更新期間が空きました。  
時がたつのは早いものです。

つまり何が言いたいかというところ。

………すいません。

## 第十四話 秘められた想い

「今回は結構ヤバイかな？」

修行も終わりを迎え、もうそこら辺の腕自慢なんて話にならないほど力をつけたと思われるエヴァ。

しかしエヴァはそれでは納得せず、どうしても俺を超えたいらしく日々を精進している。

そして勝負を挑まれる。

ワザと負けてあげるかなと思ったことも幾度となく考えた。

しかし、それは俺のプライドが許さないと言うか、エヴァが許さないだろう。

だから負けることはなく、次々と新しい戦法をとり入れるエヴァの数々の作戦を俺は苦もなく圧倒してしまう。

まあ、なにが言いたいかというと、今まで何回も・・・何百回も俺に負けているエヴァが今回の勝負こそは絶対に勝てると豪語していたのだ。

相当自信があつたのだろう、長年かけて生み出した闇の魔法。

しかしその自信も虚しく俺はまたしも圧倒してしまった・・・・・・初見で。

正確には、俺は別に初見ではなかったのだが、そんなことエヴァが知るはずもなく。

「あの落ち込みようは久しぶりに見たぞ……。」

……結論引き籠った。

「まさか7時間も経ってまだ出てこないとは思わなかった……。」

一回エヴァのあと追い魔法球の中に入って様子を窺ったが。

「入ってくるな！」

と一蹴されてしまい、これ以上機嫌を損ねまいと、とりあえず時が経つのを待った訳だが。

「……待った結果がこれというか、結果さえ出てないし。」

7時間、現実せかいではたかが7時間だが、魔法球に中では違う。

・・・7日。

そう、1時間1日の魔法球の中では7日は経っている。

「こんなエヴァは初めてだなあ。」

いつもなら長くても3時間ほどで出て来て。

「次だ、次こそは勝つからな!!」

と、俺の傍に寄って来るのだが。

「どっつするかあ。」

このまま放っておくわけにもいかないし。  
もう一度声かけてみるか……。

「よし、そうと決まれば行動だ。」

そして俺は再び魔法球の中へと入った……。

「エヴァー、エヴァさん！」

行動すると言ってもやることは扉の外から声をかけるくらい。

「いるのは解ってるんだぞー。」

扉をノックし呼びかける。

しかし………。

「反応なし、か。」

少し強めに扉を叩く、すると。

「おっ?」

扉が少し開いた、鍵をかけていたはずだが、キィという音を立て少しスキマができた。

「入ってもいいのか?」

このままここで引き下がっても何も解決しないのは解っているのだ、これは仕方ないことだ、と自分に言い聞かせながら扉に手をかけた。

「失礼するぞー?」

エヴァの寝室に足を踏み入れる。  
そして最初に感じたのは違和感。

「ん？」

部屋全体の雰囲気がおかしい。

いや、見た感じはなにも変わっていない。

「この感じは……」

この何度も味わったことある感覚は。

(……………畏?)

それしか考えられなかった。

狂気に満ちた毎日を過ごしたことがある俺は第6感といふのか、様々なことに関する直感が鍛えられている。

しかも今感じているような、全身がピリピリするような感覚は絶対と言っていいほど害があることだ。

（なんか仕掛けられてるよな？

防犯用か？今まではなかったけど・・・。）

しかしそんなことを気にしても仕方がないので、エヴァに声をかける。

「エヴァさん？ご機嫌どうですか？」

返事がない・・・。。。

俺はもう一度、明らかにいるであろう膨らんでるズットに声をかけた。

「いつまで不貞腐れてるんだよ。」

「……………つねねい。」

初めてのモーシヨン。

このチャンスを無駄にはできない。

「いつまでも引き籠っててもしょうがないだろ？」

「うう、お前のせいだろうが！毎回毎回私がどれだけ苦労していることか……。」

やっぱりか。

「エヴァ、いつも言ってるだろう？俺は存在がチートみたいなもんだって。」

「……。」

慎重に言葉を紡いでく。

「俺に勝てないことは弱いことじゃない。自分で言うのもあれだけどさ、この世界で俺に勝てる奴なんて限りなくゼロに等しいと思う。」

それこそ国が束になっても、それを一掃出来る自信があるぞ？」

「……。」

まだダメか。

「そこまで言う俺が強いって言うんだから、お前は強い。自信を持って、」

フハハこのザコ共が！ 跪け！！

ぐらい自信を持ってくれ。

じゃないと自称最強気取ってる俺が馬鹿みたいじゃないか。」

途中から何言ってるか解んなくなったが通じてくれたかな？

「・・・フフ、なんだそれは、ホントに慰めてるのか？」

ベットでずっとうつろくまっていたエヴァが起き上がる。

「悪いな口下手で。」

「まったくだな、途中から笑いを堪えるのに精一杯だったぞ？」

「そこまでか……。まあ、立ち直ってくれただけでも良しとするか。」

「む？ 私はまだ立ち直ってないぞ！

あんな意味不明な言葉で私のズタズタにされた心が癒える訳ないだろう！」

ズタズタて……………。

「ああ、はいはい。」

ではどうすれば癒えてくれますかね、お嬢様？」

「うむ、それではもう少しこっちへ来い。」

指示をされた俺は仕方なくエヴァの近くに寄る。そしてい言われた通りベットに腰をかけた瞬間。

「…………フ。」

エヴァが笑った。

「な!？」

瞬間部屋全体が輝く。

床、壁、天井いたるところに魔法陣が展開される。

「な、なんだこれ!?!?!？」

ベットから腰をあげ状況を確認しようとするが。

「逃げるな!」

腕を掴まれ倒される。

魔法陣がベットを中心に収縮していく、いや俺を中心に訂正させてもらう。

「一体なんなんだ……」

この質問を言い終える頃には俺は見えない何かに拘束されベットに寝かされていた。

「フッフ、やった・・・やったぞ、失敗したらどうしようかと思っ  
たが、そんなことは杞憂だった！」

見るからに喜びに震えているエヴァ。

「あー、エヴァさん？これは一体どういづことなんでしょうか？  
」

「レイすまないな、私の計画のためにはこうするほかなかったんだ。

計画・・・だと？

「話が全く読めないんだが。」

「おっと、その拘束を解こうとしてもしても無駄だぞ？それは私が  
長年かけて生み出した最高傑作なのだからな！」

確かに身体を動かさそうとしてもピクリもしない、というか動かさう  
としても身体が反応しない。

恐らくは脳にも作用する拘束魔法なのだろう、動くという命令を神

経に働かせない、指示を出させない。  
ふむ……………。

「……………よく出来てる。」

「当たり前だ！指一本も動くことが出来ないだろう？  
これを解くことが出来るのは生み出した私だけだ！」

「……………これか、俺が最初に感じた違和感は。  
畏が張つてあつても、エヴァだから大丈夫だろうと楽観していた俺  
のミスだな。」

「俺を拘束して何がしたいんだ？  
まさかこの状態の俺を……………」

「倒すなんてふざけた真似なんかはしないぞ？  
そんなことは私のプライドが許さない、勝負は正々堂々、たまに例  
外だ！」

「なんだそれは……………。  
じゃあ、何をする気だ？」

目的がわからん。

「む、そ、それはだな……」

歯切れの悪い受け答えをするエヴァ。

「それは？」

「お、お前の……」

「俺の？」

「全てを私にくれ!!」

はあ？

「意味が解らない。」

「だから！レイの全部を私にくれればいいんだー!!」

と叫びながら俺の体にダイブしてくるエヴァ。

拘束されている俺が避けられるはずもなく。

「づぐめー！」

腹に直撃。

エヴァが体制を整え馬乗りになる。

「え、エヴァさん？なにをする気なんでしょうか？」

「フッフ、おとなしく流れに身をまかせればすべてが終わる。」

悪寒が走る、この後の展開はよくないものだと悟る。

エヴァの意図が解るまでと思ったがそんなことを気にしている場合じゃない！

早くこの魔法の解除に取りかからねば！！

「では、最初は『仮契約』から……………」

目の前にエヴァの顔が迫る。

「は？……むぐー！……？」

塞がれる唇。

この感じは過去に一度感じたことのある感触……………。

(接吻だああああ!!!)

接吻……………いわゆるキス。

それと同時にまたも魔法陣が展開される。

「んううう!!!?!」

解除しようと専念していた脳の処理が止まる。  
光が収まり現れたのは2枚のカード。

「ん……………ぷはあ。

……………フフ、これでレイは私のものだ。」

カードを手に取り一枚を俺に向け見せる。

「仮契約完了だ！この絵を見て解るようにこれからレイは私の従者だ！！」

満足そうに宣言するエヴァ。

いきなりの展開についていけない俺。  
ただ一つ言えることと言えば。

目の前に突きだされたカードを見る。

「仮契約って描かれている人物のやつがどっちかっていうと従者なんだよな？」

「なにを当たり前のこと言っているんだ？」

「解った、それじゃ改めて言わせてもらおう。

そのカードに描かれている人物………エヴァだぞ？」

「はあ？なにを言ってるんだ？？」

私が手順を間違える訳ないだろう？」

と、カードを確認するエヴァ。  
カードに描かれている人物は……。

「な、なぜ私なんだ!?!?」

エヴァだった。

「れ、レイ。なにをしたんだ!  
こんなはずではなかったのに!」

そんなこと言われても。

「俺は悪くない。」

「レイが悪くなかったら誰が悪いんだ!?!」

「……エヴァ?」

「私な訳あるかああああ!?!」

よっぽど納得いかないのか、吠えるエヴァ。

「ま、まあ落ちつけ、叫んでもどうにもならない。  
今ある現実を受け止めるんだ。」

「受け止められるかあああ!！」

それから数分かかりやっと落ち着くエヴァ。

「くそ、わかった、この際従者うんぬんはもういいだろう。  
出来たことには変わりないんだ、うんそくだ、私に新たな力が加わ  
ったんだ……………よしとしよう。」

「そうか、納得してくれて俺は嬉しいぞ。  
ということでもう解放してくれないか？」

「ん？なにを言っているんだ??  
『最初は仮契約』と言ったろう? 『最初は』と。」

なん……だと……。

「ええと、まだなにか？」

「当たり前だろう、そうではないとここまで大がかりなことはしない。

次は……。」

まずい、このままでは本当に取り返しのつかないことになる気がする。

少しだけ、本気を出してこの状況を打破しなくては……。

しかし、馬鹿正直にこの拘束を解くには時間が惜しい、となると残る選択肢は……。

「……エヴァ先に言っておく。」

体に魔力を纏わせる。

「ん、なんだ？何を言っても私は止めないぞ??」

纏った魔力を。

「ゴメン。」

解放する。

「へ？　にゃあ！！」

エヴァの体が吹き飛ぶ。

身体の拘束を力任せにほどきその衝撃派が部屋全体を震わせる。

「大丈夫かエヴァ？」

エヴァの安否を確認する。  
見た感じ無傷そうだが。

「だ……。。」

肩を震わせ声を発するエヴァ。

「だ？」

「大丈夫な訳あるかあああ！！！！」

「ええ。」

「そんな解除の仕方があるか！このあんぽんたん！！」

古龍種でさえ数カ月は身動き一つ取れないようなものを創ったのだぞ！

それを数分で解かれて、しかも一番効率の悪い方法で突破されてたまるかあああ！！！！」

もう訳解らん、と思いつく限りの罵詈雑言をぶつけられる。

「だからゴメンって先に謝っただろ？」

「私の苦勞を返せええええええええええ！！！！」

ガクツと膝から崩れ落ち両手を床に着けるエヴァ。

見てて流石に可哀想になってくる。

「エヴァ、あのな？俺も流石に身の危険を感じたら、それ相応の行動を起こしちゃう訳であってだな。」

なだめようと近づいていく。

「……………き尽く……………奈……………術式固……………握……………。」

エヴァから声が聞こえる。

「ど、どうした?」

「『術式兵装』」

術式兵装?

魔力が膨れ上がり、目の前にいたはずのエヴァの姿が消える。

「うお!?!」

次に見えた光景は天井。

つまりはまたも床に寝かせられ、エヴァが馬乗り状態。

「また、ですか。」

エヴァ・・・こんなことに闇の魔法を使うな!!」

俺の言葉が届いているのかいないのか。

「フ、フフフ・・・レイが・・・レイがいけないんだぞ。」

私の計画をすべてを狂わして・・・ホントは私が何をしたいか解ってるんだろう?」

275

前のめりに倒れ耳元で囁くエヴァ。

微かに漏れる吐息が耳をくすぐる。

「い、いやホントに解らない。」

ていうかエヴァさん?キャラ変わってませんか??」

「ホントに・・・本当に解らないのか?」

私がここまで、キヌまでしたというのに・・・。」

確かにキスはされたがそれは。

「仮契約のためだろう？」

「……あくまでしらを切るつもりか。

それとも本当に解らないのか？鈍感すぎる。」

「ああもう！言いたいことがあるならばつきり言ってくれ！！……  
つて!?!？」

首筋にわずかな痛み。

聞こえてくるのは何かを吸っている音。

「お、お前まさか？なんで血吸ってんだよ!!！」

エヴァが血を吸っていた。

「ちゅ……ちう……レイの血、おいしい。」

ちなみにこれが初めての吸血行動ではない、定期的にエヴァが血を

くれと言ってくるので、仕方なしに俺の血を与えたりしてた。腕からとかだが。

「……………好きだ。」

「は？」

身体を起こし俺を見降ろすエヴァ、顔は蒸気し赤く染まり、ビクビクと肩を震わせる。

「レイ、好きなんだ。お前のすべてを私のものにしたい……………いや、する……………」

「え、ええ!?!?」

「ちょ、ちょっと待たないか!いや、待って下さいお願いしますうう……………」

「レイがはつきりしろって言ったのだろう！  
ほらお互いスッキリしよう！」

そういいてきばきと上着を脱がされる。

「あ、ああ。

待って！待つんだ！！待って下さい！！！！

これ以上は駄目だ！あつ、血吸わないで！？

止める！闇の魔法を解除しろ！！堕ちてるぞ！目がイっちゃてるぞ  
！！！！」

「大丈夫だ真祖の私自分で開発した魔法に呑まれる訳がない！  
そして問題なく知識が十二分にある！！

レイは何もしなくていい、すべてを私に委ねれば・・・最初からこ  
うすればよかつたんだ。

畏んたてはらずこつやつて最初からアタックしてれば・・・。。  
フッフ、レイも力づくでは私を跳ね飛ばせまい！！

さあ！おとなしくするんだ！！！！」



#### 第十四話 秘められた想い（後書き）

更新はまた伸びるかもしれませんが、書かないわけではありません。

文章が稚拙になっているかもしれませんが、頑張ります。  
これからもよろしく願います。

## 第十五話 準備（前書き）

主人公は予言書を見ながら、歴史をあまり変えないようにしながら過ごしています。

その点を踏まえて読んで頂けたら幸いです。

今回は結構短いです。

## 第十五話 準備

「そろそろここも離れないといけないなあ。」

「いきなりどうしたんだ？」

この場所に居を構えてだいぶ時が過ぎた。

どのくらい？と聞かれれば、ここにいた理由を忘れるくらい？と返してあげよう。

まあ、真面目な話、何世紀かまたがってしまったのは確か。  
多分そろそろ行動を起こさなければ色々とめんどくさいことになり  
そうな感じがする。

「というわけで旅に出よう。」

「お前はいつも唐突だな、普段はだらけてるくせに。」

「そうと決まれば早速準備しよう、そうしよう。」

「……お前は私の話を聞いているのか？」

あきれた顔をしているエヴァの言葉を聞き流し、俺はソファアールから立ち上がり身支度を整える。

身の回りの整理をし魔法球に送るものと手で持っていくものとで分けていく。

何を言っても無駄だなと悟ったエヴァはしばらく大人しくしていたが、俺が布に包んである大鎌を取り出したあたりから怪訝な顔をしだし、声をかけてきた。

「ん？なんで今それを背負ってるんだ？？」

「何って、ここを出るんだろう。  
準備しなくていいのかエヴァは？」

最初は何を言っているか解らなかったのか、段々と表情が怪訝な顔から驚いたような顔に変化していく。  
そして。

「え？まさか今日ここを発つのか！？」

俺の言葉を理解したエヴァが、驚きを隠さず俺に疑問をぶつける。

「え？今日じゃなかったらいつここを発つんだ？」

その問いに対し俺は質問で返す。  
するとエヴァの眉間にしわがよっていき、言葉を発する。

「明日でも明後日でもいいだろうが！  
なんでお前はいつもいつも思い立ったらすぐ行動なんだ！？」

何言ってるんだああ！と叫ぶエヴァをなだめながら俺は支度を再開する。

「再開するなあああ！！！」

それからエヴァがしぶしぶ支度するまでにかなりの時間を有した。

「どうしてこうなった……」

エヴァが手を地面に着きそう漏らす。

それを横目に準備が完了し整理を終えた俺は、早速出発にかかる。あたりは薄暗いが時間帯はさほど問題ではない。

「じゃ、行くか。」

「はあ、わかった。」

どこかあきらめたような顔……ではなくあきらめた顔をしたエヴァは俺の手をとる。

「ニホンだったか？」

エヴァ目的地である場所を口にする。

「ああ。」

こんな会話も結構前にした気がしたようなしなかったような感じだが、そう考えたらここにもかなり長い時間滞在してたな、と改めて考えてしまう。

しかし、長い時間を生きてると感じていても、実際にはナギさえ生まれていない……。

そんなことを思うと自然とため息がこぼれていた。

「……はあ。」

「どうした？」

そんな俺を心配した顔で見つめるエヴァ。

「なんでもない。」

「おかしなやつだ。」

ほら、行くなら早く行くぞー！

握っている俺の手に力を込める。  
俺は引つ張られる力を身体に感じ、そして眩いてしまう。

「・・・・・・・・長いなあ。」

## 第十六話 到着（前書き）

三ヶ月ぶりです。

ホントにマイペーススローペースで

このような身勝手にも関わらず、感想を頂いており感謝で一杯です！

これからも頑張りますので、よろしくお願いします！

## 第十六話 到着

「……………ええ。」

俺は、そう呟かざるおえなかった。

現在の時刻は深夜、辺りは暗く、聞こえる音はエヴァの声くらい。

日本に着き、魔力を頼りにとりあえず世界樹に辿り着いた俺達。

まあ、その間にも色々とぶらぶらとしていた訳だが、世界樹があるのであろうその場所で、そこで見た光景に目を疑った。

「……………出来てんじゃない。」

「おお、これはかなりでかい……………学校か？」

麻帆良学園が創設されていた。

(ええ、結構経ったなあ、とか思っちゃったりしたけどここまで経ってたか……………ミスった。)

実際俺の計画では麻帆良学園が出来る前にはここに訪れて、のんびり学園都市が出来上がるまで楽しもうとか考えてたわけだが。そうは問屋がおるさなかった。

今、どのくらいの時間が経っているか？  
気にかけていなかったわけではないけれど、これは確実にしくじった。

(いや、これじゃ気にかけていなかったのと同じか………)

「で、ここで何をやる気だったんだ？」

立ち止まって啞然としている俺に疑問を持ったのか、エヴァが聞いてくる。

正直ノープラン。

この学園が出来上がるまで、ゆっくり考えていこうかなと思ったけど。

学園が出来ていて、世界樹の感じを見るともう22年周期も終わってるみたいだった。

そうになると今は1900年代前半くらいか？

学園はもう出来てる、しかも学園都市、結構な規模だ。  
今まではそこから辺に居を構えて勝手に住んだり、宿借りたり、魔法  
球を使ったりしてたけど。  
今回ばかりはそうはいかない。

「いや、なんて言うか。

もうやる事が無くなった。」

「は？」

何を言ってるんだというエヴァの視線が痛い。

「はあ、ホントは何をする気だったんだ？」

溜息を吐きながら、質問を変えるエヴァ。

「この学園が出来る前にここに来て、先に住んじゃおうかなって思  
ってた。」

「なんだ？あたかも最初から、ここに学園が出来ることを知ってた  
みたいな言い方だな??」

まあ、知ってたんだが。

「まあな、エヴァも見て解るようにこの木って魔力が凄いだろ？」

「まあ、確かに。」

これほどの魔力が自然に発生する物体は見たことがないな。」

改めて観察をするエヴァ。

「この木は『世界樹』って言われててな、定期的に周期が来て魔力が飛躍的に上がるんだが。」

普段でもなかなかの魔力なのに、これがもつと凄くなるんだ。当然目をつけるやつが出てくる訳だ、解るか？」

「理解は出来るが、それがなぜここに住むという理由に繋がるんだ？ただ魔力が高いだけじゃ、レイは必要ないだろう？」

「それはそうなんだが、この木ってエヴァが想像している以上に重要な木でな、出来れば誰にも手が加えられてない状態でこの地に来たかったんだが……。」

そしてこの先の役に立てようかな、とか思ってたんだけど……。

「すでに学園が出来てた訳か。」

エヴァが相づちを入れる

「そういう訳だ。」

「……もう普通に手が加えられてるな、あそこなんか魔法陣が密集してる。」

指をさしながら世界樹の不自然な部分を確認する。

そうしていると、またもエヴァが切り出した。

「別に今からでも遅くはないだろう、レイならこのくらいの魔法を消し去るくらいなら、あつという間に済むことじゃないのか？  
しかも私も居るしな、すぐ終わるな。」

さあ、サクッとやってしまおう！とエヴァの手に魔力が込められる。

「まてまて！いくら出来るからと言って、先に見つけたのは俺達じゃない。」

しかもここには見ての通り学園が出来てる。

規模からしてもかなり大きな組織がバックについてると見ていい。」

(大体予想はついてるが……………)

あわててエヴァを止めに入るがエヴァは聞く耳を持たず。

「だから何だ？ 私達の力で圧倒できない者たちがこの世界に存在するの……？」

「そういう問題じゃないだろ！」

無駄に自信たっぷりのエヴァをどうにかたしなめる。

「解った、それじゃ消すのはやめるが、個人的に何が施されてるか気になるから、解析はさせてもらう。」

「それくらいなら……………いいか？」

弄られてるなら弄られてるで、まあ仕方ないかで済んでいる俺なのだが、以外にもエヴァが興味を持ってしまったらしい。

込めた魔力を解き放ち、大規模な魔法陣を敷いて解析をするエヴァ。

「お？あそこの魔法陣はどこか別の場所へ魔力が供給されるように組まれてるみたいだぞ。」

その魔法陣が仕組まれているだろう部分が赤く光る。

「そうか、何処に送られてるか解るか？」

「ちょっと待て、今調べてみる。」

魔法球やチャチャゼロ、闇の魔法など様々なものを自分の手で生み出してきたエヴァはこういった作業は意外にも好むようだった。

（こういうのは茶々丸の仕事とか思ったけど、そういえば原作のエヴァは魔力を封じられてたんだっけ？）

新たな発見だった。

第十六話 到着（後書き）

独自の解釈も多いかもしれませんが多めに見てください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0717s/>

---

棄却されました

2011年10月13日03時04分発行